

上郷町埋蔵文化財発掘調査報告書第22集

柏原 C 遺跡
栗屋 元 遺跡
橋爪 遺跡

—昭和62年度町道柏原9号線・辻幹線・喬木線
改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1990. 3

長野県下伊那郡上郷町役場建設課
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

上郷町埋蔵文化財発掘調査報告書第22集

柏 原 C 遺 跡
栗 屋 元 遺 跡
橋 爪 遺 跡

——昭和62年度町道柏原9号線・辻幹線・喬木線
改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

1990. 3

長野県下伊那郡上郷町役場建設課
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

序

昭和62年度において当町の施工した道路新設改良事業に伴い、埋蔵文化財包蔵地承知箇所に該当する各路線について、県教育委員会文化課ならびに町教育委員会の御指導による事前協議を経て発掘調査が実施されました。調査に当たっては、上郷町埋蔵文化財調査委員会の御援助のもと、調査団長今村善興先生（日本考古学協会員）の御指導により縦密な調査が行われ、ここにその調査結果が報告書としてまとめられました。

報告内容は、町道108号線（通称柏原9号線、延長186m・幅員4.5m）に係わる柏原C遺跡、町道189号線（通称辻幹線、延長121m・幅員4.5m）に係わる栗屋元遺跡IV地籍、町道6号線（通称喬木線丹保橋爪工区、延長199m・幅員5.0m）に係わる橋爪遺跡について記述されています。

縄文時代から弥生時代・平安時代・中世に至る広範な時代を象徴する遺構・遺物等が発見され、原始・古代史を肉づける貴重な資料として後世に残すことができましたことは御同慶にたえないところであります。

この間、開発が進む当飯伊地方の広範な箇所で発掘調査が進められる中、とくに上郷町内の調査について格別なる配慮をいただきながら報告書作成に至るまでお骨折りをいただいた今村調査団長をはじめ、関係各位の御努力に対し深甚なる謝意を表する次第であります。

平成2年3月20日

上郷町長 山田 隆士

例　　言

1. 本書は、昭和62年度町道柏原9号線・辻幹線・喬木線改良工事に伴う上郷町別府「柏原C遺跡」・黒田「栗屋元遺跡IV地籍」・飯沼「橋爪遺跡」の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、上郷町教育委員会が組織する上郷町遺跡発掘調査団が実施した。
3. 本書は、昭和62年度中は他遺跡の報告書作成作業があったので、平成元年度の事業として、整理・報告をしている。
4. 本書を作成するにあたっての作業分担は次のとおりである。
造構実測・図面修正・製図——今村・林　　造構写真撮影——今村
遺物整理——林・福田・今村　　遺物実測・製図——林・今村
遺物拓影——林・福田・今村俱　　石器実測・製図——福田・今村
5. 本書は、執筆・編集とも今村が分担している。
6. 3遺跡に亘る報告書のために、各項遺跡ごとにまとめ、図版も遺跡ごとに配列した。
7. 本書に関連した遺物及び記録・図面類は、上郷町教育委員会が管理し、上郷町歴史民俗資料館で保管している。

目 次

序 文	上郷町長 山田 隆士
例 言	
I 発掘調査の経過	1
1. 発掘調査の経過	1
(1) 柏原遺跡の調査	1
(2) 橋爪遺跡の調査	1
(3) 栗屋元遺跡IVの調査	2
2. 調査組織	3
(1) 上郷町埋蔵文化財調査委員会	3
(2) 上郷町遺跡発掘調査団	4
II 遺跡の立地と環境	5
1. 自然的環境	5
2. 歴史的環境（遺跡を中心にして）	7
III 発掘調査の結果	11
1. 柏原C遺跡	11
2. 栗屋元遺跡IV地籍	11
(1) 遺跡の概要	11
(2) 遺構と遺物	13
① 4号住居址	13
② 5号住居址	13
③ 土壙群	14
ア. 土壙12・13 イ. 土壙2・3 ウ. 土壙7 エ. 土壙8・10 オ. 土壙17	
カ. 土壙18 キ. 土壙20 ク. 土壙22・27 ケ. 土壙24	
④ 溝 址	26
ア. 溝址7 イ. 溝址8 ウ. 溝址9 エ. 溝状遺構	
⑤ その他の遺物	27
3. 橋爪遺跡	35
(1) 遺跡の概要	35
(2) 遺構と遺物	35
① 近世建物址	35

② 溝状遺構 1・2	35
③ 弥生時代遺物出土地	36
④ その他の遺物	36
IV 調査のまとめ	41
1. 柏原C遺跡の調査	41
2. 栗屋元遺跡IV地籍の調査	41
3. 橋爪遺跡の調査	42
後記	

図版目次

第1図 柏原遺跡・栗屋元遺跡・橋爪遺跡位置図	6
第2図 柏原・栗屋元遺跡周辺遺跡図	9
第3図 橋爪遺跡周辺遺跡図	10
第4図 柏原C遺跡調査区位置図	12
第5図 栗屋元遺跡IV遺構配置 1	16
第6図 栗屋元遺跡IV遺構配置 2	17
第7図 栗屋元遺跡IV遺構配置 3	18
第8図 栗屋元遺跡 4号住居址出土土器	19
第9図 栗屋元遺跡 5号住居址出土土器	20
第10図 栗屋元遺跡 5号住居址、溝址7、土壤(7・18・24)出土土器	21
第11図 栗屋元遺跡 4号住居址出土土器拓影	22
第12図 栗屋元遺跡 4号住居址、溝址8、5号住居址出土土器拓影	23
第13図 栗屋元遺跡 5号住居址、溝址7出土土器拓影	24
第14図 栗屋元遺跡溝址7・9、土壤1~10出土土器拓影	28
第15図 栗屋元遺跡土壤12~27、その他出土土器拓影	29
第16図 栗屋元遺跡 4号住居址、溝址8出土石器、土壤10出土石皿	30
第17図 栗屋元遺跡 5号住居址、溝址7出土石器	31
第18図 栗屋元遺跡溝址7出土石器	32
第19図 栗屋元遺跡溝址7、土壤(3~24)出土石器	33
第20図 栗屋元遺跡土壤(2・13・18・24・27)、溝址9、その他出土石器	34
第21図 橋爪遺跡調査地位置図	37
第22図 橋爪遺跡近世建物址、グリット土層図	38
第23図 橋爪遺跡近世建物址出土陶器	39
第24図 橋爪遺跡出土陶器・土器・石器	40

写真図版目次

図版1	柏原C遺跡遠望	44
図版2	調査前の栗屋元遺跡IV地籍	45
図版3	栗屋元遺跡IV遺跡調査地	46
図版4	栗屋元遺跡4号住居址、溝址8	47
図版5	栗屋元遺跡5号住居址、溝址7	48
図版6	栗屋元遺跡4・5号住居址の遺物出土状況	49
図版7	栗屋元遺跡東側の遺構	50
図版8	栗屋元遺跡溝址8・土壤24の土層断面	51
図版9	栗屋元遺跡溝址8の砂層堆積状況	52
図版10	栗屋元遺跡C地区の土壤群	53
図版11	栗屋元遺跡土壤(1)	54
図版12	栗屋元遺跡土壤(2)	55
図版13	橋爪遺跡調査地と土層	56
図版14	橋爪遺跡近世建物址(1)	57
図版15	橋爪遺跡近世建物址(2)	58

I 発掘調査の経過

1. 発掘調査の経過

昭和61年から町内各地の町道改良工事に伴い周知の埋蔵文化財包蔵地に関わるところについて建設課と教育委員会でその対応について協議が行なわれていた。道路改良工事は年度当初に計画はあるものの、用地取得に当たっては、地権者の同意が得られなければ調査も工事が進まず調査の計画が立てにくく、教育委員会は苦慮することが多い。

昭和62年度には上郷町内ではいくつかの町道新設・改良工事のほか、農村基盤整備事業上黒田東部地区・小規模排水対策特別事業下黒田中部地区・土地改良総合整備事業大明神地区・土地改良総合整備事業南条地区・地域農業拠点整備事業別府下河原小手抜地区等があり、該当する埋蔵文化財包蔵地の数も10か所以上に及んだ。そのために調査体制の確立が検討され、町の専任職員が採用され、上郷町埋蔵文化財委員会が組織され、町を挙げての調査組織が確立された。

昭和62年4月10日、第1回「上郷町埋蔵文化財調査委員会」が開かれ、調査委員会の規約・組織が決定されて、この年度の調査が2班編成により開始されている。

町道改良工事に伴う埋文包蔵地の発掘調査は、用地取得のめどが立たないために年度当初予定が立ち兼ねたが、9月に入って用地交渉が進み、平畑・八幡原遺跡・垣外遺跡と矢崎遺跡の調査期間を調整して、急速9月28日から柏原遺跡・栗屋元遺跡・橋爪遺跡の発掘調査を進め、10月30日に次の調査地矢崎遺跡に掛かっている。

(1) 柏原遺跡の経過

昭和62年9月28日に上黒田垣外遺跡から資材を搬入して試掘調査を開始している。用地は200mに及ぶ広い範囲だったので北から50mづつA～G地区にわけ、グリッド掘りをする。北側A地区で縄文時代土器片、陶器片が少量、B地区で縄文時代土器小片が発見されただけで遺物・遺構の発見はなく、10月3日調査を終了した。

(2) 橋爪遺跡の調査

昭和62年10月5日柏原・垣外遺跡から資材を運搬して調査に入る。既設道路の両側2m程しか調査範囲がないので、東側繁場（岡田勇雄氏）前の道路交差点を基点にして西側へ50mごとに区分してA～C地区に分け、既設道路北側を主にしてグリッドを設定する。グリッドは道路南側を1・道路北側を4列とし、東側からA～Yに区別した。作物状況の良いところを選びグリッド掘りをする。B地区1V～C地区Aでは近世陶器が多く出土しピット・溝・焼土が検出されて、近世の建物址がありそうであった。B地区4列U～Yに掛けては砂層・粘土層が複雑に堆積し、中

世陶器・平安灰釉陶器・土師器片・弥生時代後期土器片が所々で発見されている。

作物の取り入れも遅れ、黒田栗屋元地籍の道路工事が急がれることもあって、10月8日一時中断して栗屋元遺跡の調査にかかる。

10月26日、栗屋元遺跡の調査が終ったので再び橋爪に戻り、B地区4DEの弥生時代後期土器出土土地、近世建物址周辺を主体に検出作業を続ける。弥生時代土器出土土地は調査範囲が狭いこともあってはっきりしないが住居址のようであった。C地区4西側でグリットを掘り造構の確認はないが須恵器・灰釉陶器片が発見されている。10月29日A地区1列、水田地の未調査区を残しながら調査日程の関係で調査を終している。

(3) 栗屋元遺跡IVの調査

10月12日橋爪遺跡の調査を中断して栗屋元遺跡の調査に入る。現地は既に工事が進行し、調査可能の範囲は30mほどしかなかった。しかも、その部分も表土は重機で削り取られ、土器片が散乱し住居址も削られていた。便宜的にAC5から10m単位にA～C地区に分け整地作業をする。A地区には縄文時代の住居址と溝、B地区にも縄文時代の住居址と溝があり、ともに溝により住居址が切られている。C地区南道路寄りには土壤群があった。

住居址は栗屋元遺跡I・II・III次調査区に統いて4・5号住居址、溝は7・8・9である。10月14日から4号住居址・溝7、5号住居址・溝8の検出作業に入る。住居址は残りが浅く、西側用地外に入り、しかも溝で切られていて検出面が少なかったが、溝8・9とも広く深いので検出に手間取っている。10月20日までは溝の検出をほぼ終了して、21日から土層断面図取り・南側の土壤群の検出を済ませて、10月23日現地作業を終了している。

その後、昭和62年度の諸土地改良事業に伴う平畠・八幡遺跡、矢崎遺跡、一丁田遺跡の報告書作成のために町道関係の調査報告の準備は遅れていた。平成元年度に至り、町道3遺跡の報告書作成の計画がなされ、他地区的現地調査の合間に利用しながら整理作業を進め、平成2年1月から2月にかけて調査報告書の作業を進めている。

2. 調査組織

(1) 上郷町埋蔵文化財調査委員会

① 規約

(設置)

第1条 この会は、「上郷町埋蔵文化財調査委員会」(以下委員会という)と称し、事務局を上郷町教育委員会事務局に置く。

(目的)

第2条 この委員会は、上郷町内の関係各機関・団体及び考古学関係者の相互協力により、上郷町埋蔵文化財保護事業の円滑な実施をはかることを目的とする。

(事業)

第3条 この委員会は、前条の目的達成のため、次の各号に掲げる事業を行う。

- (1) 遺跡調査の総合企画、連絡・調整に関すること。
- (2) 土地所有者等の発掘承諾に関すること。
- (3) 発掘調査員及び作業員の確保に関すること。
- (4) そのほか目的達成に必要なこと。

(役職員)

第4条 この委員会に次の役職員を置く。

- (1) 顧問1名、会長1名、副会長2名、委員若干名、事務局員若干名
- (2) 顧問は町長とし、そのほかの役員は委員会において互選する。
- (3) 委員は次の通りとする。

教育委員5名、文化財保護委員5名、考古学関係者3名、産業常任委員長、建設常任委員長、土地改良事業等地元代表者

- (4) 事務局員は関係各課局の職員を充てる。

(役員の職務)

第5条 会長は委員会を代表し、会務を総括する。副会長は会長を補佐し、会長事故あるときは、その職務を代行する。

(会議)

第6条 この委員会の会議は、会長の招集により開催する。

(そのほか)

第7条 この規約に定めるもののほか、会の運営に必要な事項は委員会において決定する。

付則

1. この規約は、昭和62年4月10日より施行する。

② 役職員

顧問	山田 隆士（町長）	
会長	北原 忠夫（教育委員会委員長～62. 9）	小室 伊作（同上 62. 10～）
副会長	北原 治人（産業常任委員長～62. 4）	岩崎 智道（同上 62. 5～）
	小木曾英寿（文化財保護委員長）	
委員	小室 伊作（教育委員～62. 9）	牧野 光弥（文化財保護委員）
	北原 勝（教育委員）	麦島 正吉（同上）
	矢崎 和子（同上）	菊本 正義（同上）
	北原政治郎（同上 62. 10～）	稻垣 隆（同上）
	吉川 昭文（教育委員会教育長）	北原 治作（大明神地区）
	平栗 弘（建設常任委員長～62. 4）	堀口 信幸（別府小手抜地区）
	篠木 俊寛（同上 62. 5～）	畠中 尚二（別府下河原地区）
	今村 善興（日本考古学協会員）	中島 博男（下黒田中部地区）
	佐藤 鮎信（同上）	唐沢 富雄（南条地区）
	岡田 正彦（同上）	佐々木啓治（上黒田東部地区）
事務局員	吉川 昭文（教育委員会教育長）	篠田 公平（建設課課長）
	菅沼 富雄（同上 事務局長～1. 3）	宮下 成式（同上 工務係長）
	林 康一（同上 1. 4～）	井坪 恵俊（同上 工務係）
	吉川 勝一（同上 局長補佐）	中 良文（同上）
	山下 誠一（同上 社会教育係）	下島 美和（教育委員会社会教育係）
	吉川 金利（同上 1. 4～）	

（2）上郷町造跡発掘調査団

調査団長	今村 善興（日本考古学協会員）	
調査主任	山下 誠一（同上）	
調査員	岡田 正彦（同上）	
調査補助員	林 貢 米山 義盛（～63. 3）	伊藤 泉（～63. 3）
作業協力員	堀口 勇造 宮脇 直人 吉川 佐一 岩崎 泰三 濑古 郁保 菅沼 庄三 下田 忠彦 原 佑三 福田 千八 小林 薫 大坪 安江 松田 照江 高橋 美玲 今村 俱栄	

II. 遺跡の立地と環境

1. 自然的環境

橋爪・栗屋元・柏原遺跡の所在する長野県下伊那郡上郷町は、長野県の南端を南側と北側に走行する南・中央アルプス山脈の谷間に広がる飯田盆地のほぼ中央に位置する。野底山・鷹巣山が北西にあり、そこを源とする野底川・土曾川が南流し飯田松川・天龍川に注いでいる。この両河川に挟まれて、東西に細長く続く面積26㎢に及ぶ広大な緩傾斜地形の地域である。

北は土曾川によって飯田市座光寺・野底川上流地域では高森町・飯田市松川入に境している。西・南は鷹巣山・風越山から野底川下流・松川によって旧飯田市・旧鼎・旧松尾地籍に接している。この地域は南流する天龍川と、その諸支流によって形成されたいくつもの河岸段丘や広大な扇状地の広がるところであって、とくに上郷町の段丘・扇状地は広いので、原始・古代から現代までの優れた生活舞台が展開している。

『下伊那の地質解説』によれば、伊那盆地全域に形成されている伊那谷の段丘は火山灰土の堆積を基準にして高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・Ⅱに大きく編年されている。上郷町にある段丘面は、中央に広がる下黒田・飯沼境の大段丘を境にして上段と呼ばれる洪積土壌の堆積する中位段丘・低位段丘Ⅰと、下段と呼ばれる沖積土壌の堆積する低位段丘Ⅱが何段かに構成されている。

低位段丘Ⅱに当たる段丘面は飯沼面・別府面・南条面と呼ばれ、飯田市松尾地籍とともに下伊那地方の段丘模式地域ともなっている。上段伊久間面（黒田面）の大きな段丘崖はやく50Mの比高があり、標高420～430Mほどの飯沼面、その下方に410～420Mほどの別府面、さらに下方に400～410Mほどの南条面が帶状に続いている。南条面は天龍川現河床面との比高差5M程の低位面から、国道153号線に近いところ（標高415M）まで滴入するところがあって、土壌堆積の複雑さを物語っている。このことは大段丘崖下・他の段丘崖下の豊富な湧水・地下水と相まって「宇沼の里」と伝承される沼沢的な低湿地の存在も予想され、現在でも典型的な水田地帯となっている。この段丘面の中央部を国道153号線が、最下位段丘面を農免道路が南北に走行している。

橋爪遺跡は飯沼南に包括されるが南側に続く南条面に近いところに位置して砂・泥土の堆積が目立つところである。栗屋元遺跡は低位段丘Ⅰに包括され野底川により形成された段丘状地形に立地していて北垣外遺跡とともに平坦緩傾斜面が広く続いている。柏原遺跡は中位段丘に属し山麓に接する上郷町においては高位の段丘上にある。



第1図 柏原C・栗星元・櫻爪遺跡位置図

2. 歴史的環境（遺跡を中心にして）

上郷町の遺跡は、昭和57年度の詳細分布調査によると、埋蔵文化財包蔵地67・古墳32・中世城跡3の合計104遺跡が確認され登録されている。昭和59年頃から各地の発掘調査が進み、新発見の遺跡もあったり、古社寺跡等も含めれば更にこの数は上回る。

上郷町の遺跡を中心とした歴史的変遷を概観してみると、12,000年以前の旧石器時代の遺構・遺物は現在のところみつかっていない。上郷町最古のものは、上段の姫宮遺跡出土の表裏縄文式土器片・柏原A遺跡の石器剥片・栗屋元遺跡の有舌ポイントにより、縄文時代草創期の黎明を知ることができる。次の縄文時代早期になると比較的山寄りの八王子遺跡など5遺跡から、押型文土器や縄維を含む条痕文及び撚糸文土器が出土している。平成元年1月の町道改良工事に伴う西浦遺跡の発掘調査でこの時期の竪穴式住居址が検出され注目されている。約6000年前の縄文時代前期の遺跡は姫宮・日影林・大明神原など8遺跡があり、今まで上段の中位段丘・低位段丘I地帯に限られていたが、昭和61年矢崎地籍の町道改修に伴う発掘調査で前期後半の住居址が検出され、下位段丘面での生活地も検証されている。

次の縄文時代中期になると爆発的に遺跡数も増加して、低位段丘南条面下段を除き、町内全域に遺構・遺物の発見が目立っている。中期の遺跡49か所中、日影林・八幡原・栗屋元・大明神原・増田遺跡等は集落址・遺物多量発見地域として注目されている。この後に続くやく3000~4000年前の縄文時代後期には遺跡数は減少し、上段を中心に8遺跡に留まっている。昭年61年発掘調査の日影林遺跡のように住居址・土壤群が検出されるように、今後の発掘調査に期待される時期でもある。最終末の縄文時代晩期の遺跡は3か所知られていたが、昭和62年の矢崎下河原地区整備事業に伴う発掘調査で、東海系の浮線網状文土器片が多量に発見されて注目されている。

次の弥生時代は水稻栽培が生活基盤となる新しい文化で、下伊那地方へは三河・尾張・美濃方面から伝播されたものと推定される。弥生時代前期の遺物は極少ないが、中期になると遺跡数は増大する。下段の低湿地周辺に集落の形成が推定されていたが、確証を得るまでには至っていないかった。昭和60・61年、南条下田畠地区基盤整備事業に伴う発掘調査で県下最初の弥生時代中期・後期の水田址が検証され脚光を浴びている。飯沼丹保では住宅造成に伴う発掘調査で住居址が2軒検出され、上郷町でもこの時期の遺構発見が続いている。この時期の遺跡の大半は下段の飯沼・南条・別府地籍に集中することから、低位段丘II地帯にみられる低湿地帯を利用する水稻耕作の展開が類推されている。やく1800年前の弥生時代後期になると、その遺跡は山麓地帯から天龍川氾濫原際に至る広範囲に44か所以上あり、高燥段丘上でも畑作・稻作が行なわれたものと思われる。その代表的なものは住居址34軒を検出した高松原遺跡であり、方形周溝墓11基と住居址34軒を検出した塙外遺跡・大量の土器群の充満した住居址を含め、集落の一部を検出した矢崎地区兼田遺跡・住居址5軒と祭祀的な土器群をもつ土壤列の検出を見た飯沼丹保遺跡等である。山麓に近い扇状地頂部や山地内小台地にも遺物の発見が伝えられ、標高700mに近い柏原上方地区でも

変形土器が発見されている。

古墳時代の遺跡は集落址と墓域とに区別される。上郷町の古墳は煙藏古墳を含めて32基、その大部分は別府地籍の松川に面する台地端に立地し、一部が飯沼段丘崖下にある。いずれも後期古墳で、天神塚・番神塚の両前方後円墳以外は円墳である。この頃の集落は古墳の近在にみられ、現在のところ上段では明確なものがなく、下段の経済的基盤の豊かな地域で発見されている。遺跡数が多い割に集落址の発見例が少ないのが現状であるが、今のところは古墳時代前期・後期の土師器を多量出土した南条の蔽越遺跡・飯沼北の的場遺跡、別府の兼田遺跡に留まっている。遺物多量出土地籍は飯沼・南条・別府各地籍に多いので今後は発見例が続くものと思われる。

奈良・平安時代の遺物は町内全域で収拾できる。奈良時代・平安時代の選別は容易ではないが、平安時代の遺構・遺物は野底山山中から下段の天龍川氾濫原跡の最下位段丘まで存在が予想される。生産域の水田地まで含めれば濃淡の差はあるが、町内全域に広がっている。下段地帯の松川左岸、栗沢川・土曾川右岸に所在する中島・化石・高麗・丹保、室外垣遺跡等では多量の須恵器片が発見される。昭和62年に発掘調査した矢崎遺跡（下河原地区）は100軒以上と推測される平安時代の大集落地で大規模な鍛冶遺構が検出され、フイゴ羽口や鉄滓等の多量出土により上郷町の重要な遺跡のひとつとなっている。近年実施された隣接地飯田市座光寺の詳細分布調査により、土曾川左岸地域では川に接する低地から、最下位段丘先端まで全域にわたって奈良・平安時代の遺物が採集されているが、この例は上郷町でも同様である。

奈良時代の遺構発見地は現在のところ下伊那地方では10指に満たないが、栗屋元遺跡・垣外遺跡でそれぞれ1軒だけであるが奈良時代の居住址が検出され注目されている。

低位段丘Ⅱ地帯は、伊那郡家所在が有力視される飯田市座光寺の恒川遺跡群と同一段丘面上にあって、遺物出土状況は大差なく濃密なところである。しかも古代条里制遺構の存在が地割や地名からも推測され、豊かな湧水・地下水に恵まれ生産域と居住域とが交互に立地する地帯で、古代史探究上きわめて貴重な地域のひとつである。標高410～415M辺りは小段丘先端部が南北に連なるところで、奈良時代に都と国府を結ぶ官道東山道の通過候補地のひとつとして注目されている。

中位段丘上は縄文時代・弥生時代の集落地として知られるだけでなく、律令東山道の通過地との説もあり、平安時代の小集落の発見・古字からみると中世的な文化の匂いが強く、平安時代以降中世の大きな生活舞台であったことも予測され、今後の調査・研究に大きな期待が持たれる地域もある。



1. 柏原C 2. 栗屋元 3. 柏原A 4. 柏原B 5. 日影林 6. 八幡原 7. 平畑
 8. 菓師前 9. 米の原 10. 町張 11. 今村 12. 赤坂 13. ミカド 14. ツルサシ
 15. 五木木 16. 北の原 17. 社宮寺原18. 宮下 19. 大明神原20. 見城垣外21. 原の城A
 22. 原の城B23. 原の城 24. 福島 25. 堀外 26. 桜畠 27. 砂原田 28. 桜垣外
 29. 北垣外 30. 川底 31. 日光原 32. 三反田 33. 高松原 34. 南原 35. ドドメキ

第2図 柏原・栗屋元遺跡周辺遺跡図



- | | | | | | | |
|----------|---------|----------|---------|---------|---------|---------|
| 1. 橋爪 | 2. 矢矧 | 3. 丹保 | 4. 堂垣外 | 5. 長崎 | 6. 輪上 | 7. 竹の内 |
| 8. 柳田 | 9. 高屋下 | 10. 兼田 | 11. 渡場 | 12. 矢崎 | 13. 宮垣外 | 14. 高屋 |
| 15. 輪の越 | 16. 北浦 | 17. ピクニ烟 | 18. 一丁田 | 19. ヒエ田 | 20. 中島 | 21. 化石下 |
| 22. 堀尻 | 23. 芝崎 | 24. 御藏前 | 25. ママ下 | 26. 的場 | 27. 西浦 | 28. 院下 |
| 29. ドドメキ | 30. 南原 | 31. 高松原 | 32. 目光原 | 33. 砂原田 | 34. 振垣外 | 35. 桜煙 |
| 36. 川底 | 37. 三反田 | 38. 北垣外 | 39. 栗屋元 | 40. 原の城 | 41. 垣外 | 42. 福島 |

第3図 橋爪遺跡周辺遺跡図

III 発掘調査の結果

1. 柏原C遺跡

調査の経過でも触れたように、柏原9号線改良工事用地内186mの範囲で、試掘した13のグリットでは、縄文時代中期土器片・石器・近世陶器片が少量発見されただけで、遺構の検出はなかった。周辺の状況は、A地区の東側では近世陶器片が、C地区西側では縄文時代中期の土器片が、またC地区東南地域では以前に石鎚・黒曜石を採集したことがあるので、生憎の空白地帯であったと思われる。

2. 栗屋元遺跡IV地籍

(1) 遺跡の概要

環境の項でも触れたように、旧来から縄文時代中期の代表的な遺跡である障子垣外地籍にあたり、遺物・遺構の発見は予想されていた。また、町道辻幹線改良工事にともない、東側から3回に亘って発掘調査が行なわれ、上方へ来るにしたがって遺物出土も多く、とくに北東側隣接地の郵政省職員住宅用地内では、奈良時代住居址・縄文時代中・後・晚期の土壤群が検出されていて、近くに集落の存在が推測されていた。

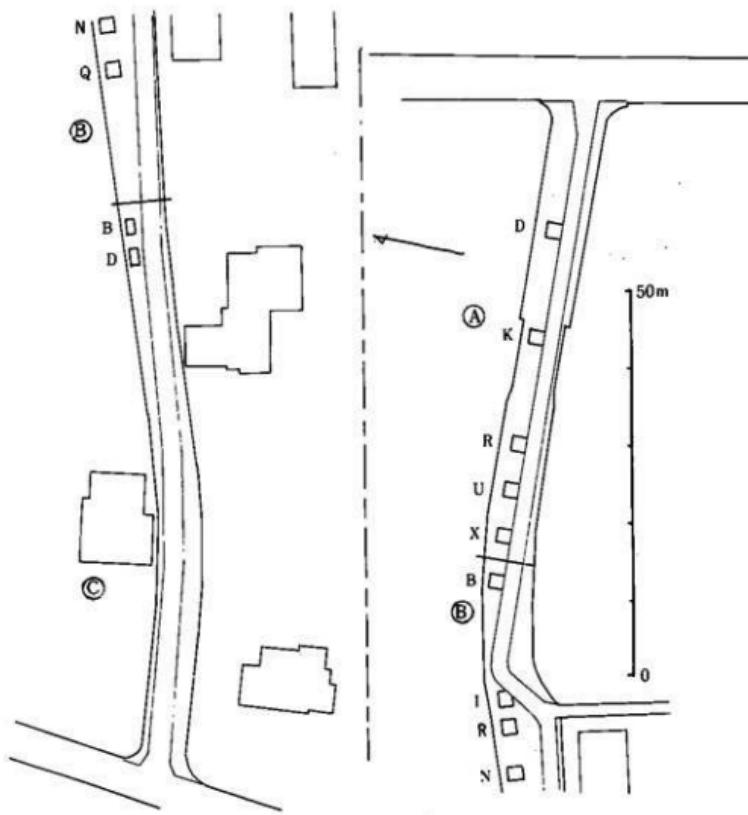
田畠の土手沿いに道路改良される工事であることと、既に重機による掘削・擁壁工事が進行していて、用地全域について調査ができなかったが、縄文時代中期後葉住居址・中・後葉の土壤群、後代の溝址の検出をみている。

「主な遺構・遺物」

縄文時代中期住居址2・縄文時代早期・中期土壤27、時期不詳溝址3。

縄文時代早期末前期土器片4・縄文時代中期中葉土器片30、縄文時代中期後葉変形土器半個体10、同土器片200以上、同土偶1、同石器50以上。

縄文時代中期の住居址は、西側用地外に半分以上隠れ、両住居址とも大きな溝址に切られていたので、ほんの一部しか検出できなかったが、西側に主体をもつと思われる障子垣外地籍出土の粘土紐張り付け文を主体とする時期の住居址で、この期の集落の外縁に当たると思われる。土壤群は西側に多く集中し、下伊那地方としては土器片の件数が多いもので、縄文時代早期のほか、中期中葉・後葉のものが重複している。溝址3のうち溝址7・8は幅3m以上、深さ2mほどもある雄大な溝で、それぞれ4・5号住居址を削り落している。溝の中程から下にかけてそれぞれ



第4図 柏原C遺跡調査区位置図

の住居址の遺物が集中的に出土していることから、比較的古いものと思われる。

(2) 遺構と遺物

① 4号住居址

ア. 遺構(第4図)

調査地東側、北側用地外にかけて発見されている。北側半分は用地外、東側は溝址8に切られて、検出された面積は3分の1に過ぎない。覆土も重機に削りとられ、壁高も8cmしか残されていなかった。全体のプランは不詳であるが、残された壁回りから推量すると、5.5~6mほどと思われる。床は溝8により上部が削られたり、砂のかぶりがあって軟弱ぎみであるが、炭を含む覆土・比較的多めの土器片によって識別できた。焼土や炉は検出されない。北側の溝によって破壊されているものと思われる。主柱穴はP₁・P₂・P₃(深さ49・21・53cm)と思われるが、はっきりしない。北側用地境に42×55cm、深さ47cmの土壤状ピット(P₄)があり、填底から変形土器半個体(7図1)が出土している。

イ. 遺物(第7・10・11・15図)

土器は完成品が少ないが、P₄・No1・4地点で出土している。7図1はP₄出土の変形土器で、胴部から口辺にかけて粘土紐張り付け文で構成され、退化傾向の楕形文を持つキャリパー型土器で、5も同個体であろう。2・3は1地点4~9は4地点出土のもので、粘土紐張り付け・押圧突帯と半割竹管文・楕形文をあしらった2個体の土器である。

第10・11図の土器片は1~5地点・溝址8出土である。7図の土器と同個体または類似個体のものが多く、溝8出土のものも、4号住居址に類似のものが多い。とくに溝址8の土器片は、溝西側の壁沿いに多く出土していることから、4号住居址のものが落ち込んだものと思う。

第15図は石器である。4号住居址と溝址8のものが含まれている。8・17は溝址8のもので、ともにチャート製石匙・ポイントで、あるいは一時期古いかもしれない。

住居址の形態、完形遺物が少ないとからははっきりしないが、縄文時代中期後葉の住居址で、以前に障子垣外で発見されている土器群に類似している。

② 5号住居址

ア. 遺構(第5図)

調査地中央やや東寄り、北側用地外に掛かり、南東側を溝址7に切られた住居址である。残された住居址面は、全体の6分の1程度である。住居址のプランは不詳で、覆土上面も重機による掘削が進んでいて、壁高も15cmほどしか残されていない。東側溝沿いに焼土塊があり、深さ21

cmの底に炭混じりの焼土があったが、地床炉とは思われない。ピットは3個、P₁・P₂・P₃（深さ57・82・58cm）で、柱穴としては深さは十分であるが、P₃は位置的に気になる。床面は炭を含む黄褐色土が固いところがあったが、東南部は溝7と細い溝に切られて、軟弱ぎみであった。遺物は北側ほど多く（土器地点1～5）、南側では溝7に落ち込んでいた。

イ. 遺物（第8・9・11・12・16図）

遺物は重機による掘削と、溝7による切断により、少なめである。残された住居址の北側で5か所ほど土器片の固まりが発見されている。第8・9図の土器片の番号は出土地点を示している。（番号の付されていないものは、覆土または溝7の縁である）粘土紐張り付け文を主体にして、横形文もみられ、4号住居址のものに類似している。

第11・12図の土器片は、住居址の出土地点1～5、覆土中、溝7の縁・溝底のものがある。第11図19～26は出土地点1～5、28～49は覆土中、第12図1～34は溝7の縁または上層、35～50は下層出土のもので、住居址床面と溝上層で出土したものは時期的な差異はみられず、住居址のものが落ち込んだものと思われる。多くは縄文時代中期後葉のものである。溝7の下層には中期中葉のものも含まれているが、後葉のものもある。

石器（第16図）の多くは、住居址の覆土・溝7の縁から出土している。短冊形のものもみられるが、総体的には横刃型・不整形のものが多く、小型石器は軟質チャート製の粗製なものである。

③ 土壙群

土壙は大小あわせて27基検出されている。調査地区を便宜的にA～C地区に分け、東側から5号住居址までをA、中間をB、西側をCとして一覧表にしたものが次の表である。

造構配図3枚（第4・5・6図）をA・B・Cとすればほぼ位置が一致する。

A地区は3基、B地区は6基、C地区は18で多くはC地区に集中する。調査地は道路改良部分に限られ、さらに既設道路部分・排土置場・用水路管敷設があって第6図にみられるように、幅3m以下に限定されているから、その周辺には多くの土壙が存在するものと予想される。

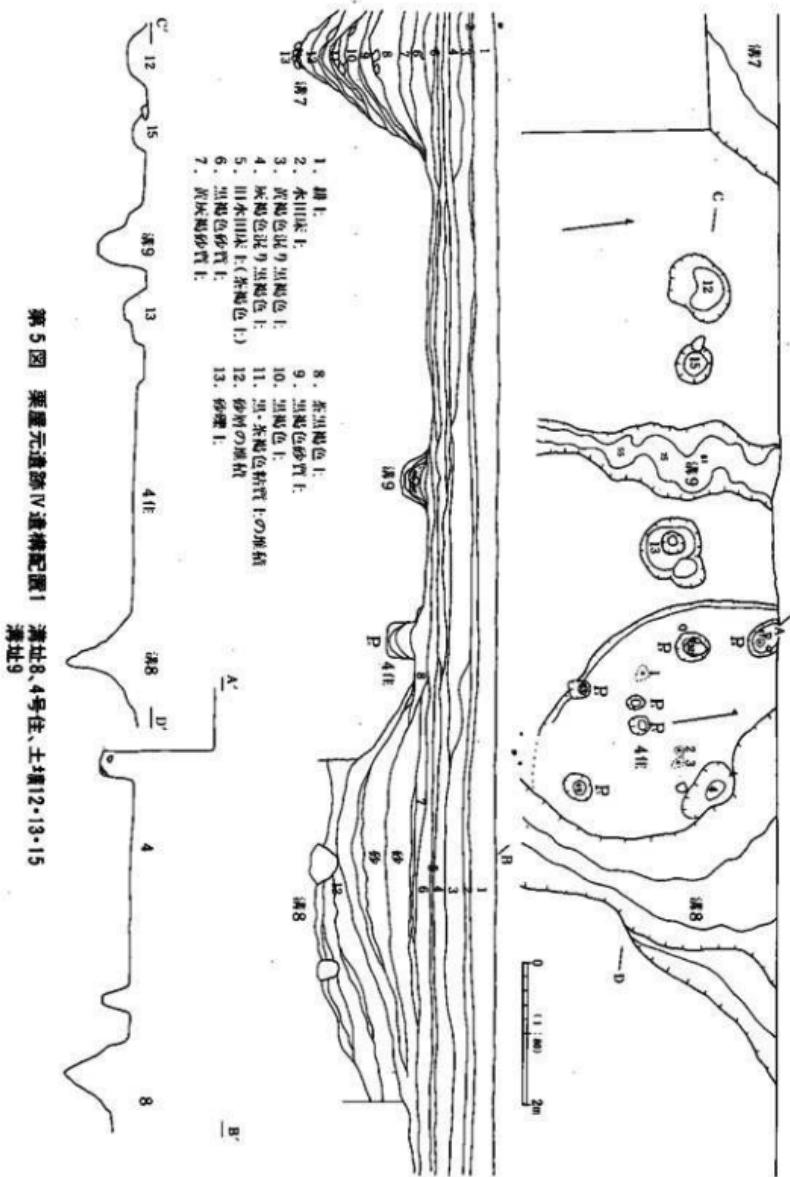
個々の土壙の時期判定は困難ではあるが、出土遺物の状況から縄文時代早期末・前期は1基（10）、同中期中葉（1・2・3・12・13・15・17・22・24）は9基、同中期後葉・時期不詳は17基と思われる。主な土壙について報告する。

ア. 土壙12・13（第4・17・18・19図）

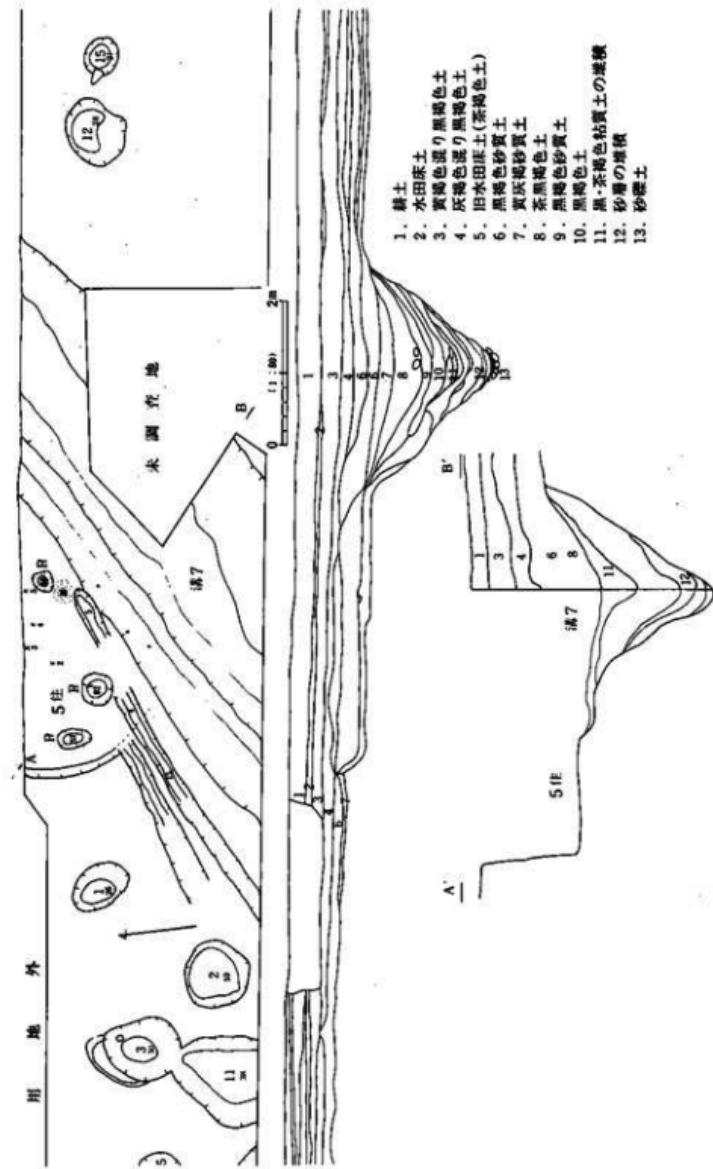
A地区溝9を挟んで並ぶ3基の土壙のうちである。上部が削られているので浅い土壙であったが、土壙13は二重構造でピットの重複もある。土器片の出土は多めで、爪形・半剖竹管文系の土器が多く、とくに藤内系のものである。石器は土壙13出土のスクレーパー（19図17）がある。土壙15を含めてここの3基は中期中葉かと思われる。

表1 土壌一覧

地区	土壌番号	出土土器片	石 器	図版記載土器			土壌の形態			備 考
				実測	拓本	特 長	大きさ	深さ	特 長	
A	● 12	5	1		3	爪形・竹管文	85×90	28		石
"	● 13	10	2		3	爪形	82×84	39	二重	
"	● 15	1			1	薄手	54×50	21	ピット状	
B	1	3	1		3		57×84	26		
"	● 2	8	2 スクレーパー・石鏃		4	爪形・竹管文	95×90	59	筒状	
"	● 3	7	4 磨 石		4		88×104	30		
"	4	1	1		1		70×—	33		
"	5	1					63×70	33		
"	11						140×150	30		
C	6						60×90	20		
"	7	24	5 磨 石	1	13		160×—	72	二重	
"	8						40×60	20		10と重復
"	9						45×65	16		
"	● 10	4	2		2	無文口縁 早・前期	60×90	26	ピットあり	
"	14						45×65	66		8と重複 石
"	16						55×—	15		
"	● 17	3			3	無文・竹管	45×48	21		
"	18	3個体	1	3		無文厚手多	105×108	31		
"	19						—×90	31		
"	20	16	2 石墻石 1		6		10×—	37		
"	21	1					115×110	29		
"	22	3	1		2		115×120	29		
"	23						55×—	30		
"	● 24	23	4 土偶	11	竹管・爪形		125×140	47	筒状	
"	25						—×115	38		石・炭
"	26						50×60	20		
"	27	16	1	10			100×120	21		

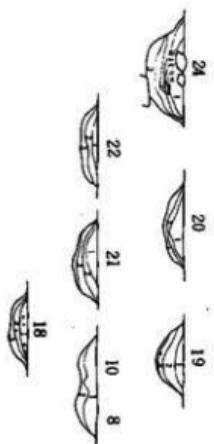
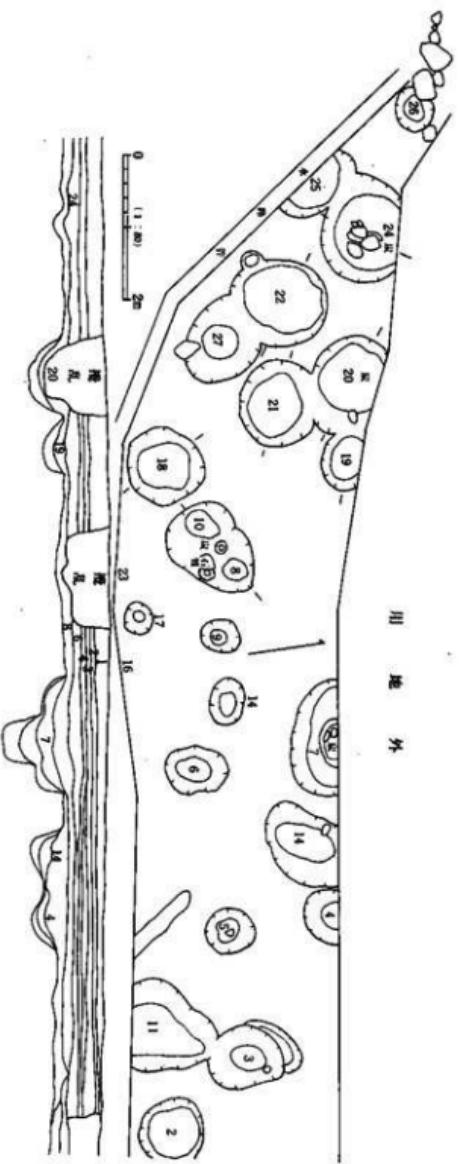


第5図 楽屋元遺跡IV遺構配図
溝址9、4号柱、土塁12・13・15



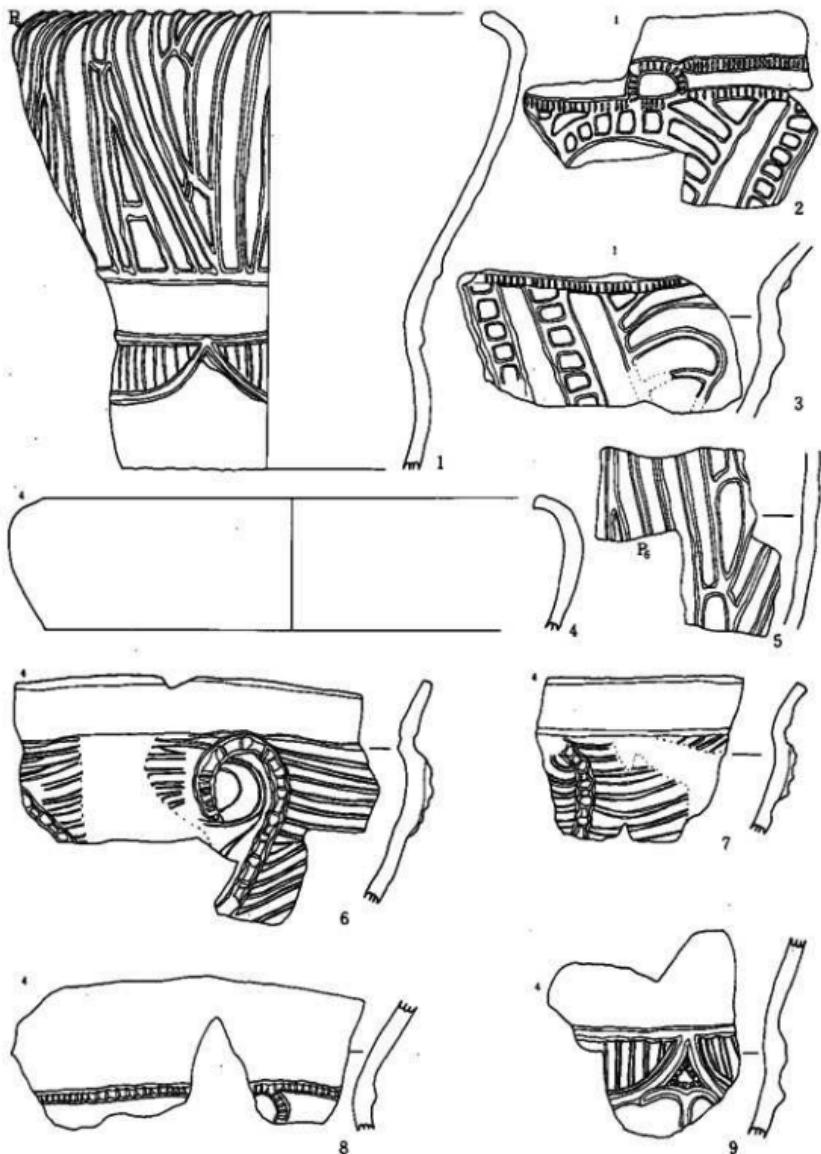
第6図 神戸元遺跡N遺構配圖2 渋谷7、5号住、土壤1~3・11

用 地 外

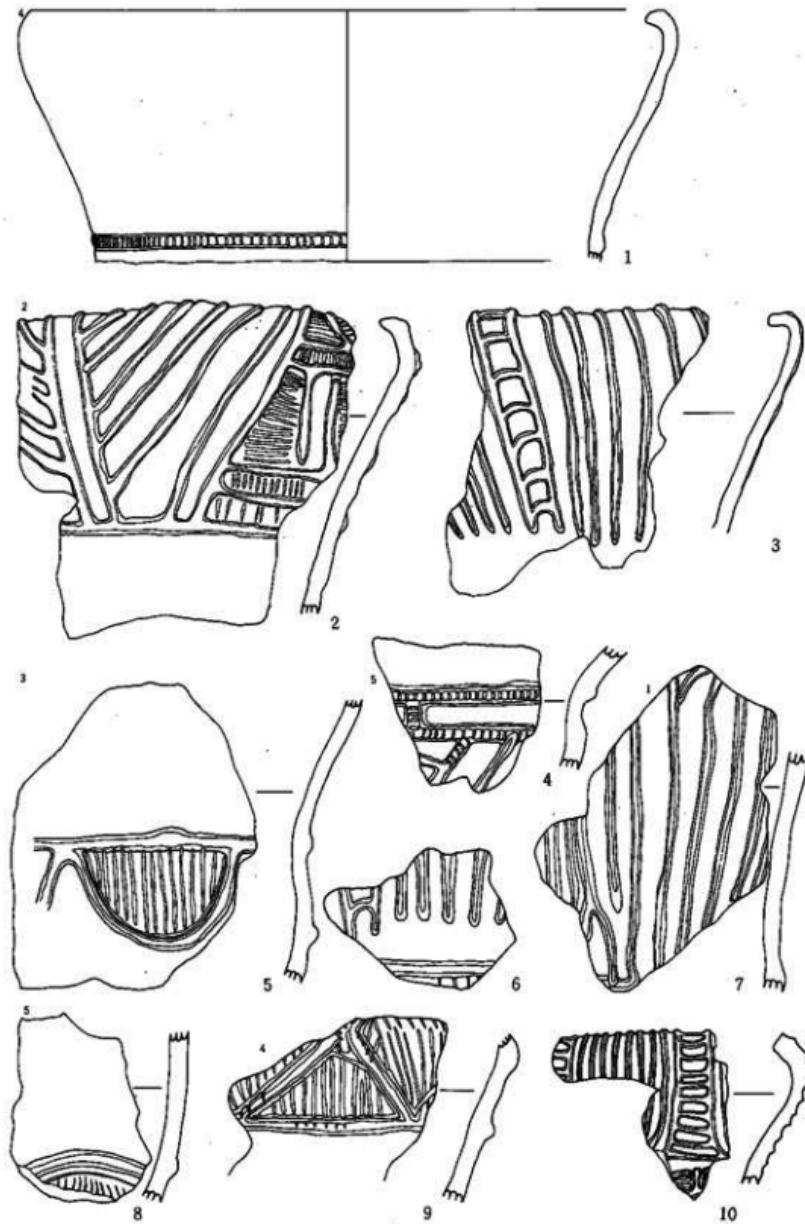


1. 黑褐色 I.
2. 水田黑 I.
3. 黄褐色 I.
4. 黑褐色(深) I.
5. 黑褐色 I.
6. 黑褐色(深) I.
7. 黑褐色 I.
8. 黑黑褐色 I.

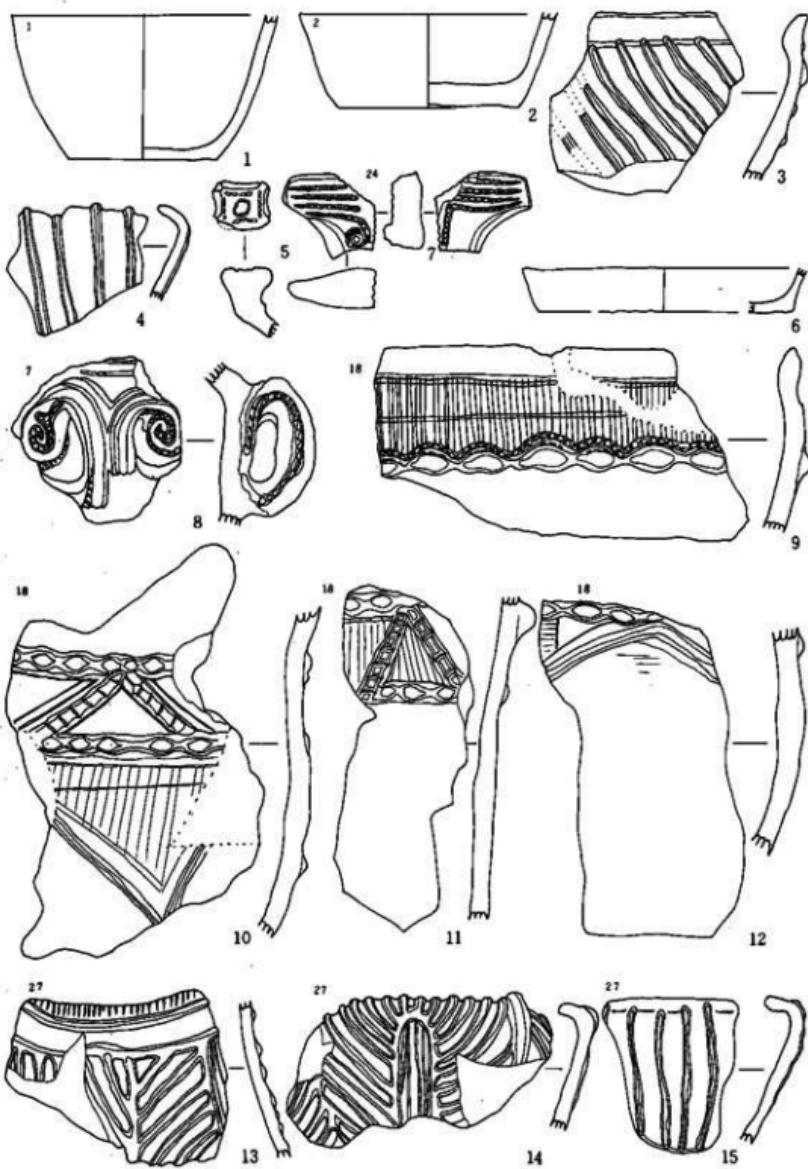
第7図 菜屋元遺跡IV遺構配圖3 東側土：群(2・5～27)



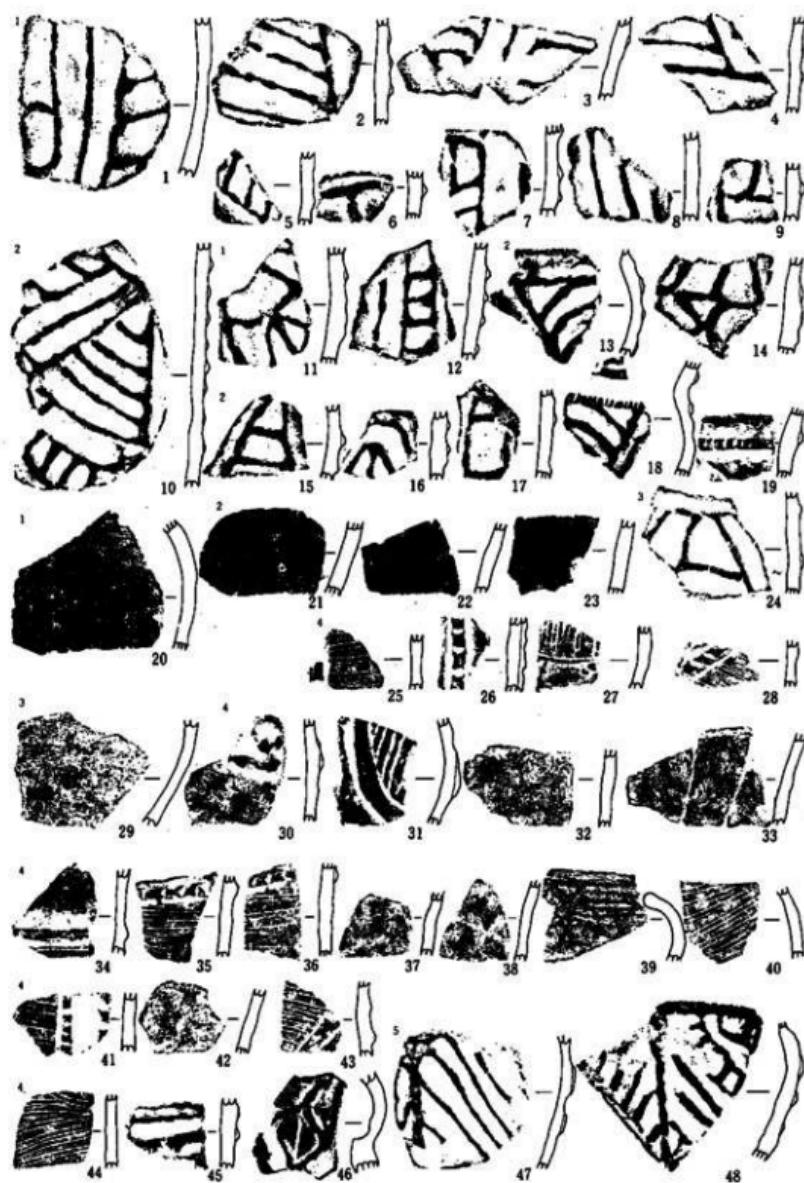
第8図 栗原元遺跡 4号住居址出土土器



第9図 栗屋元遺跡 5号住居址出土土器



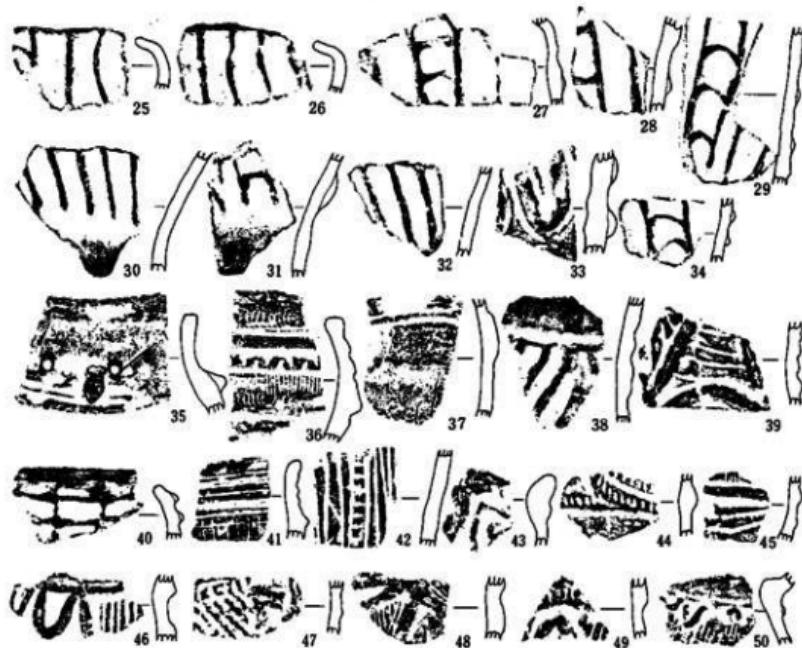
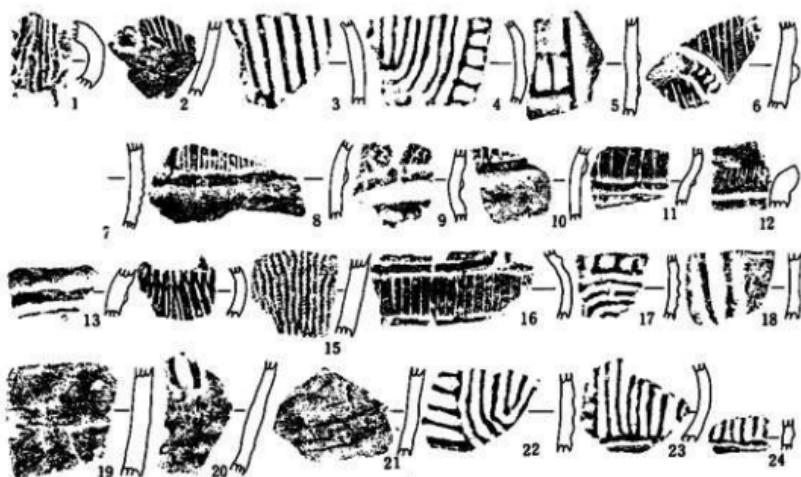
第10図 粟星元遺跡 5号住居址・溝址7・土壤出土土器
1・2・5住、4・6・溝7、7・24、8・F7、9・12・F18、13・15・F27



第11図 栗屋元遺跡 4号住居址出土土器拓影



第12図 栗屋元遺跡 4号住居址、溝址8、5号住居址出土土器拓影
1~9 4号住、10~18溝址、19~49 5号住



第13図 栗屋元遺跡 5号住居址、溝址7出土土器拓影

1-15 5号住 16-50 溝址7

イ. 土壙2・3（第5・6・13・18図）

5号住居址の西側に散在する土壙のうちである。ともに掘り方は深めで、2はとくに深く簡状である。土器片の出土は多めで、爪形・半割竹管文（第13図28～37）が目立つ。石器は2出土の変形スクレーバー・石鎌（曾根形・19図15・16）・3出土の磨石・横刃型石器（18図8～11）がある。土壙1を含めて、縄文時代中期中葉のものではないかと思う。

ウ. 土壙7（第6・9・13・18図）

C地区北側用地外に半分かかって検出されている。1.6mほどに及ぶ大型のもので、二重構造で深さも72cmあって、炭混じりの黒色土の覆土が観察された。土器・石器の出土も多く、土器は中期中葉・後葉のものが出土している。9図8は中葉の変形土器把手、13図40～52は中葉・後葉のものがみられ、多くは粘土紐張り付け文のものである。石器は18図12・13・15・19で、12は半磨製敲打器で、敲打面がよく残されている。石器・土器片は土壙の中層からである。古手の土器片は含まれているが、主体となるものは中期後葉と思われる。

エ. 土壙8・10（第6・13・15図）

土壙8・10が重複しており、壙底に2個のピットがある。ピットの上に石皿（15図18）が伏せておかれていた。土壙は浅めであるが、炭を含む茶褐色土の覆土が観察される。土器の出土は少なめではあるが、13図53・54の土器は薄手・無文の波状口縁で、口縁張り付けのもので、縄文時代早期末か前期の土器かと思う。

オ. 土壙17（第6・14図）

土壙10の南側にある小振りな土壙で、ピット状のものである。土器片の出土は3点だけであるが、半割竹管・羽状縄文のもの（14図8～10）で、中期中葉かと思われる。

カ. 土壙18（第6・9・14図）

土壙10の西南にあった大型の土壙で、土壙中層から大きめな変形土器片（9図9～12）が出土している。9は口辺部に竹管による縦の施文・横の押圧突帯・波状の刺突文で構成され、10～12は頸部から肩部上方にかけて、押圧突帯・竹管文・刺突文により三角の区画を構成する、大型変形土器の破片である。柳形文は見当たらないが、4号住居址と土器と最も類似するもので、他の土壙には類似のものは少ない。

キ. 土壙20（第6・14図）

C地区西側用地外に一部にかかって検出されている。やや浅めの土壙であるが、炭を含む覆土の堆積が観察される。土器片の出土は多いが、小片が多い。竹管文もみられるが、粘土紐張り付

け文もみられる。

ク. 土壌22・27（6・9・14図）

C地区の西側で、重複して検出された土壌である。ともに浅めの土壌であるが、27は土器片の出土が多いが、あるいは混同しているかもしれない。22の土器片は小型薄手で、前期内な感じもある。（14図18・19）27の土器は9図13～15・14図20～27のように粘土紐張り付けを主体とする土器片で、出土量は非常に多い。検出作業が終末の忙しい時であったから、22と27の遺物が混同していることもあるので、新旧2時期の土壌が重複しているのかもしれない。

ケ. 土壌24（第6・6・17・18図）

C地区西外れ、用地外に一部かかって検出されている。大型の土壌で深さも47cm以上あり、土壌上部には人頭大の石5個を配し、炭を多く含む堆積土が何層にも重複していて、筒状の土壌である。土偶の胸部から腕部（9図7・14図30）が中層から出土している。刺突文による並行沈線があり、その一本は乳房を取り巻くように構成されている。14図31～38の土器片は爪形・半割竹管文・羽状繩文がみられ、土偶とともに繩文時代中期中葉のように思われる。石器（18図20・21）は石斧と鍤石である。土偶・土器片・石器とも土壌の中層からの出土が多い。

④ 溝 址

今回の調査区では、溝址は7・8・9と小溝が検出されている。溝番号は以前に発掘調査された栗原元遺跡Ⅲ（郵政省職員宿舎）の溝址（1～6）に引き続いて呼んでいるもので、溝址が3・溝状造構が1である。

ア. 溝址7（第5・9・12・13・16・17・18図）

B地区5号住居址の東南を切るように、北東から南西に向かう大きな溝址である。排土場所確保のために、未調査区を残しているので全容はつかみにくいが、幅は北側用地境で3m、中央付近でも3m、深さは調査地面で2m、表土から測ると3.4mに及ぶ。

溝底まで掘ったのは北側用地境と5号住居址の東側だけであるが、北側ほど堆積層が複雑であることが観察されている。北側用地境の土層断面測量が記録することができたのは、今回の調査の大きな成果の一つである。その土層図によると、1～6層、つまり耕作土・水田床土・黄褐色混じり黒褐色砂質土・灰褐色混じり黒褐色粘質土・旧水田床土・黒褐色砂質土である。

その下層から、溝址の覆土の堆積が始まる。7～13まで記録した。黄灰褐色砂質土・茶黒褐色土・黒褐色砂質土・黒褐色粘質土・茶黒褐色粘質土の堆積層・砂層の重複・砂礫層の複雑な堆積である。溝底の状態は不詳のことが多いが、溝の深さは北よりも南が急激に深さを増している。砂層の堆積をみると、黑色土を挟んで幾層にも堆積していて、多時期に亘る堆積の繰り返しが推

測される。

遺物は、5号住居址で説明したように、住居址沿いのところに非常に多い。中層以上のものは住居址からの落ち込みとみられる。下層からも中期後葉のものもあるが、多くは12・13図にみられよう中期中葉のものも含まれている。

イ. 溝址 8 (第4・11・15図)

調査地東側4号住居址の東・南を切って、北から西南へ湾曲ぎみに流れる溝址である。幅は、北側用地境では6mほどあるが、4号住居址南側では85cmと極端に狭まっている。深さは用地境で1.3mまでは掘ったが、砂層が多く溝底まで完全に掘りあげることができなかつたので、さらに深さは増すものと思う。堆積層も幾層にもあるが、溝址7とは大きく違って黒色土の間層ははっきりしないで、色・質の違った砂層の重複である。溝址7との相違をどう判断したら良いかわからないが、時期の違い・流れ方の違いがあるものと思う。

遺物の出土は溝址7に比べると少ないが、4号住居址につながる遺物の落ち込みは考えられる。溝址7と同様に、縄文時代の遺物のほかは検出されていない。

ウ. 溝址 9 (第4・13・19図)

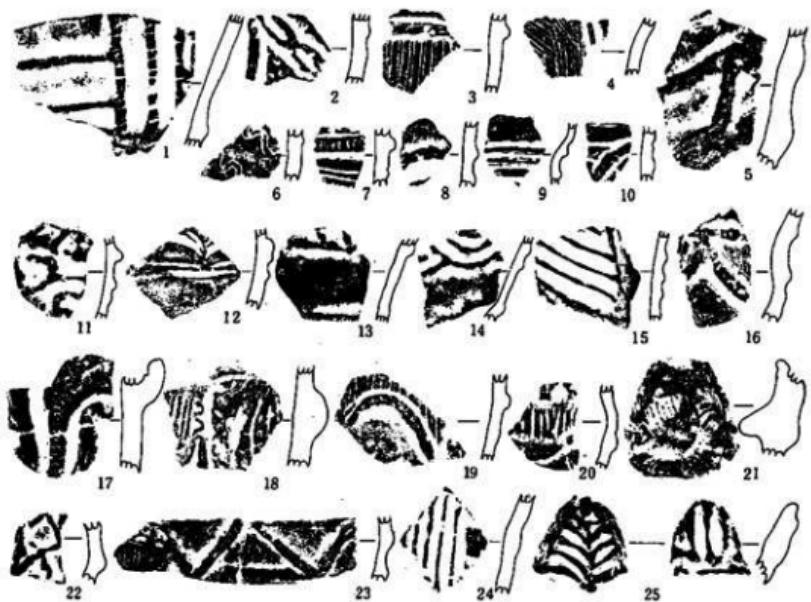
4号住居址の西側で、南北方向に続く溝址である。幅は用地境で90cm、中ほどで95cm、南側では35cmの所もある。深さもまちまちで、40・55・61・75cmと変化に富み、水の流れによる影響を如実に物語っている。土器は13図26・27で、中期中葉の土器片ではあるが、摩滅の進んだものである。石器も19図3～8のもので、小破片が多く摩滅したものである。

エ. 溝状造構 (第5図)

5号住居址西側にあって、溝址7に北西側を並走する2条の細い溝がある。4号住居址の覆土から検出されているのと、黒色砂質土の覆土であったから新しい時期のものと思われる。

⑤ その他の遺物 (第14・19図)

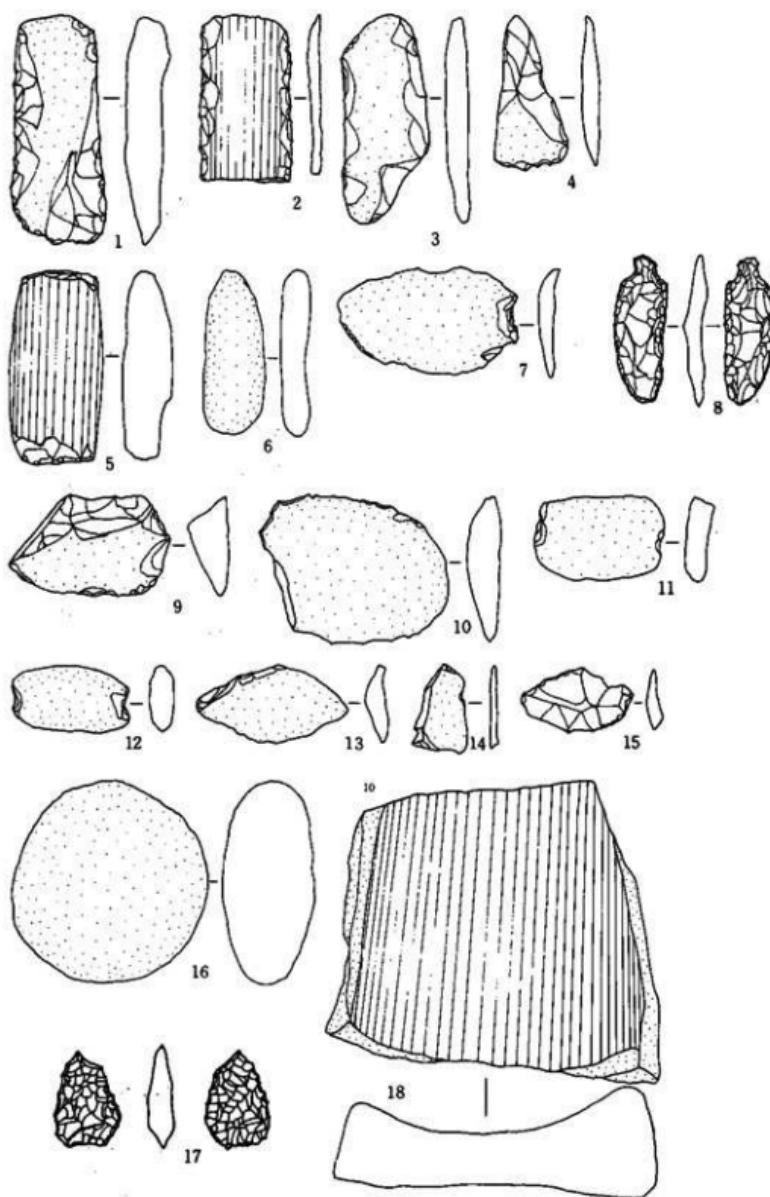
14図40～52の土器は主なものをあげてあるが、中期中葉から後葉のものである。このほかには近世の硝鉢・陶器片少量のほかには、他時期の遺物は発見されていない。



第14図 栗星元遺跡 溝址7・9、土壤1-10出土土器拓影（小番号は土壤番号）



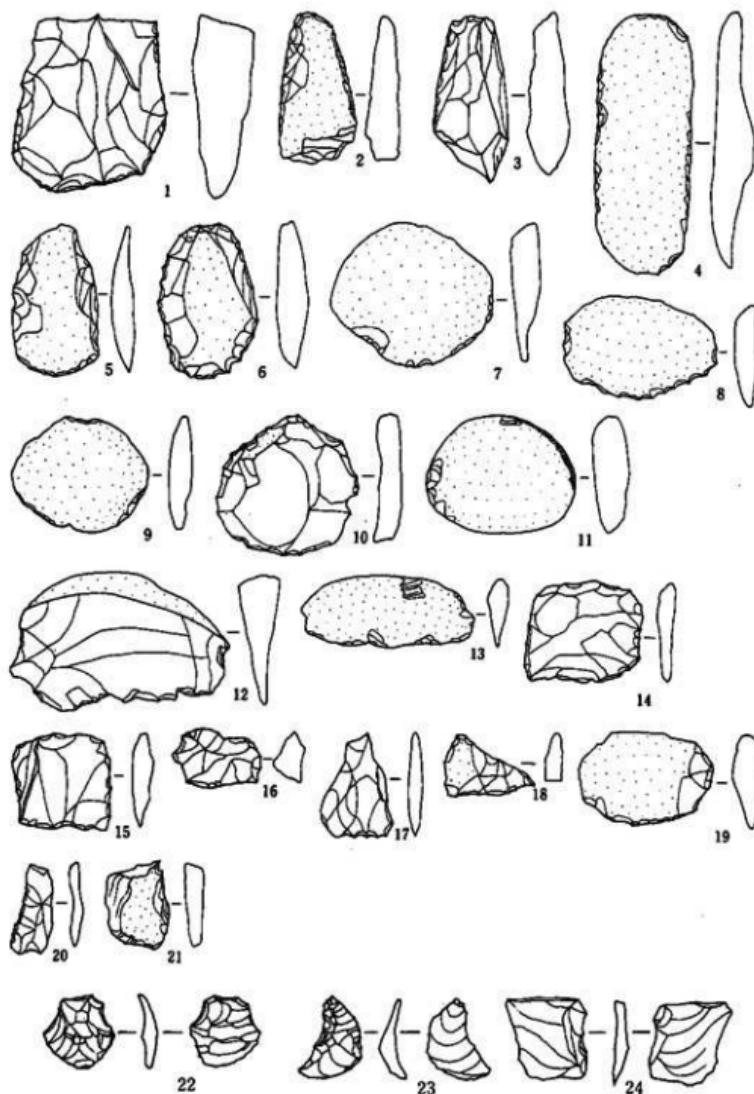
第15図 栗屋元遺跡 土壙12~27、其の他出土土器拓影（小番号は土壙番号）



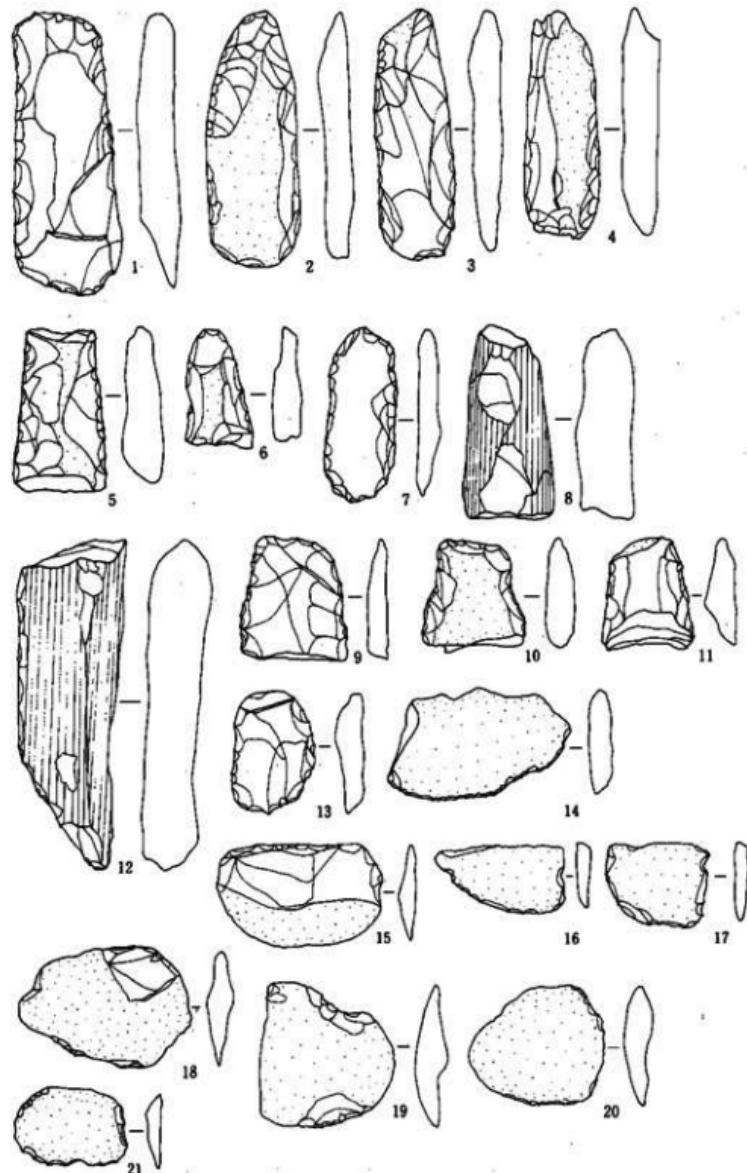
第16図 栗屋元遺跡 4号住居址、溝址8出土石器、土壤10出土石皿

-30-

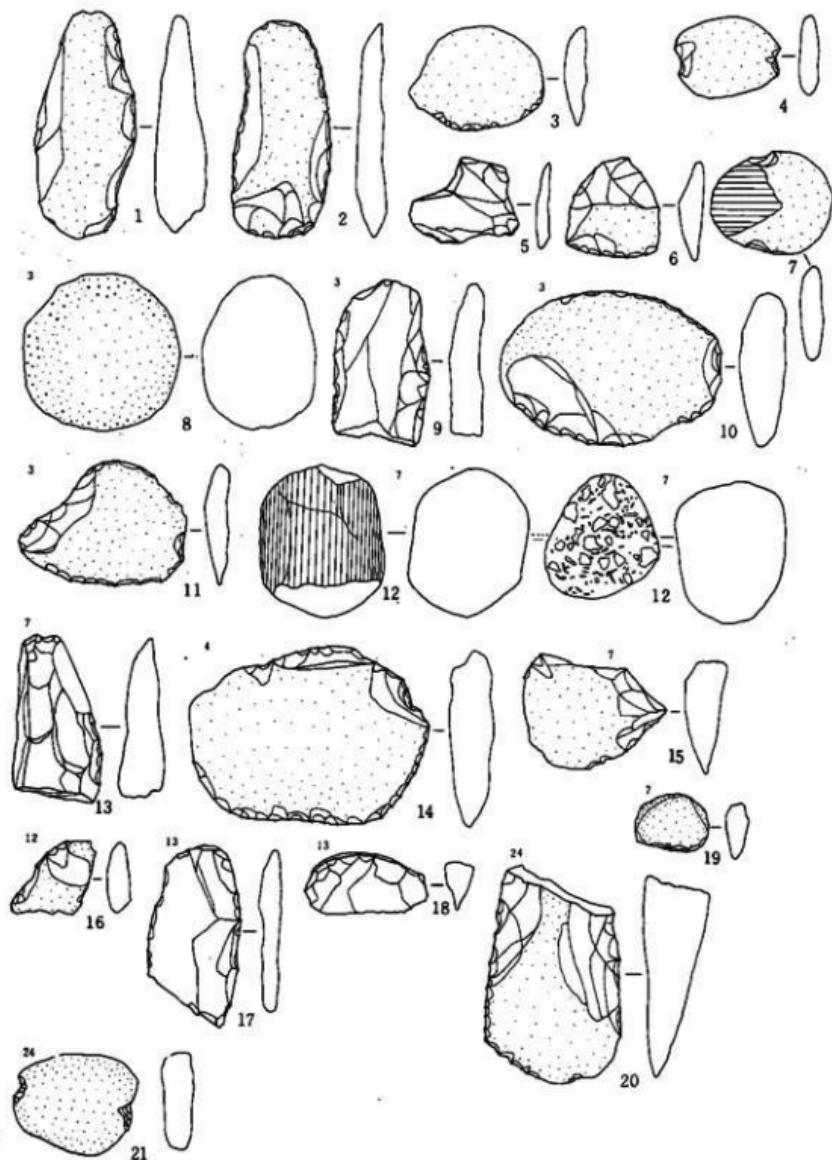
17 1 : 2



第17圖 栗屋元遺跡 5号住居址、溝址7出土石器



第18図 栗屋元遺跡 溝址7出土石器



第19図 栗原元遺跡 溝址7、土壤(3-24)出土石器(小番号は土壤番号)



第20図 栗屋元遺跡 土壌(2・13・18・24・27)、溝址9、其の他出土土器(小番号は土壌番号)
15~18 1 : 2

3. 橋爪遺跡

(1) 遺跡の概要

橋爪遺跡は西に矢觸、北に丹保、東に堂垣外遺跡が、比高差5~6mの小段丘を挟んで隣接し南側やや低位地に長橋遺跡が続いている。今回の町道喬木線の改良予定地は、橋爪遺跡の北縁にあるところで、遺物出土の有無を確かめる調査でもあった。

調査は、既設道路が中央にあり、両側拡幅部の用地はそれぞれ2mほどで、グリット調査が精一杯であった。しかも、稻・野菜等の収穫前でもあったので、調査可能の場所に限定されたので、十分な調査は難しかった。また、予想以上に深いところから弥生時代の遺物出土もあって拡張調査もできなかった。しかし、遺物の発見量は少なかったが、弥生時代後期・平安時代・中世の遺物発見もあって、当初の目的を果たすことができた。

「遺構・遺物の概要」

遺構 近世建物址 1、中世以降の溝状遺構 1、弥生時代遺物出土地 1。

遺物 近代・近世陶器 多、中世陶器片 15、平安時代灰釉陶器片 10、同須恵器片 5、平安時代土師器片 10、古墳時代土師器片 5、弥生時代後期土器片 10、石器 8

(2) 遺構と遺物

① 近世建物址（第20・21・22図）

B地区V~C地区Cにかけて検出された遺構である。石列をもつ溝（21図5）、竪穴（3・4）溝（2）、溝状遺構（1）、多くのピット・土壤状の落ち込み・焼土・埋甕等の遺構を一括して建物址と扱った。全体に砂質土がかぶり、灰茶褐色の粘質土を基盤にして溝状の凹み・竪穴状の落ち込み・土壤状の落ち込み・石列をもつ溝が同方向にあること、不規則ではあるが多くのピットが並び、2か所に焼土があり、埋甕（21図6）が設けられていることから、何らかの工房的な建物址と思われる。

遺物は埋甕（22図18）のほか茶碗・碗・鉢・皿・土鍋・小鉢・甕・摺鉢・鍍鉢等の破片が多く出土している。22~26は甕と摺鉢の拓本であるが、総じて近世末のものが多く、なかには近世初頭かと思われるものもあるが、やや古いと思われるものは、B地区V辺りで出土している。

② 溝状遺構1・2（第20・22図）

B地区I・Qグリットで発見された溝状遺構である。ともに既設道路の下に掛かるために、十

分な検出はできていない。B地区Iの溝状遺構(M1)は、深さ1mほど下にあり、その縁かと思う辺りには石列があり、その周辺から常滑陶器片・山茶碗片(23図11)・土師器片が出土している。溝に直接つながる遺物ではないと思われるが、周囲の土層は振り返された形跡があって、ある時期に構築されたようにも思われる。B地区Qの溝(M2)もM1に類似しているが正体は不詳である。A地区Mでも細い溝状遺構は検出され、その周辺から弥生時代の底部(23図2)と変形土器片が出土している。

③ 弥生時代遺物出土地(第20・23図)

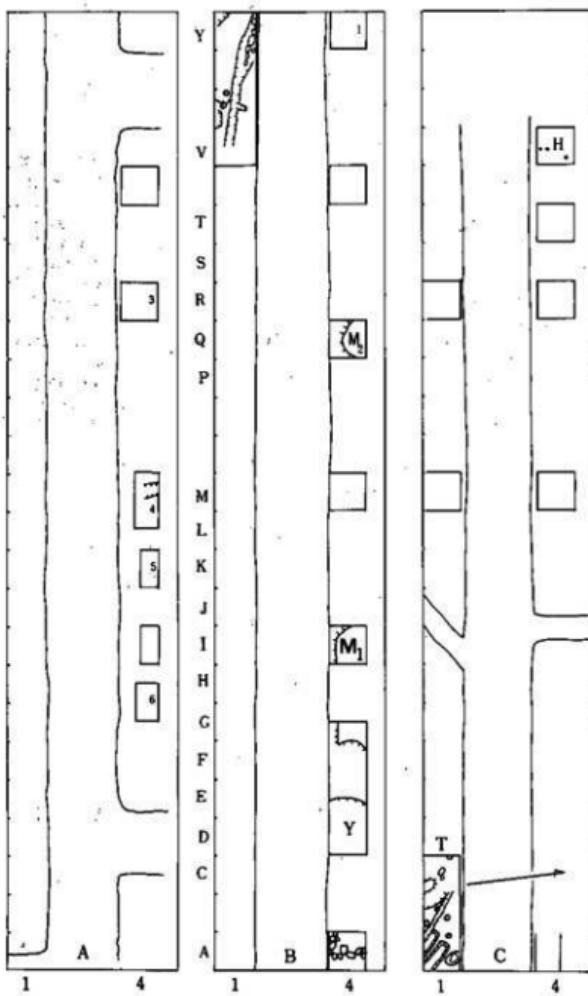
B地区D～Fグリットで弥生時代の遺物が集中して出土している。地表下1.2mほどから弥生時代後期の土器片・石器が出土し、覆土らしい土層もあり、僅かな落ち込みがみられたので、住居址かと思われるが、確証がないので、遺物出土地とした。横には拡張したが、北側は排土の場所と用地事情で拡張できず、住居址の確認までには至っていない。

遺物は24図3は有段器台形土器の坏部、6は环形土器口縁、13は変形土器頭部で、ハケ目文が見られ、土質・形態から寄道系のものと思われる。石器は23図16～18で、17は変形有肩扁状形石器、18は粗製の打製石包丁形石器である。

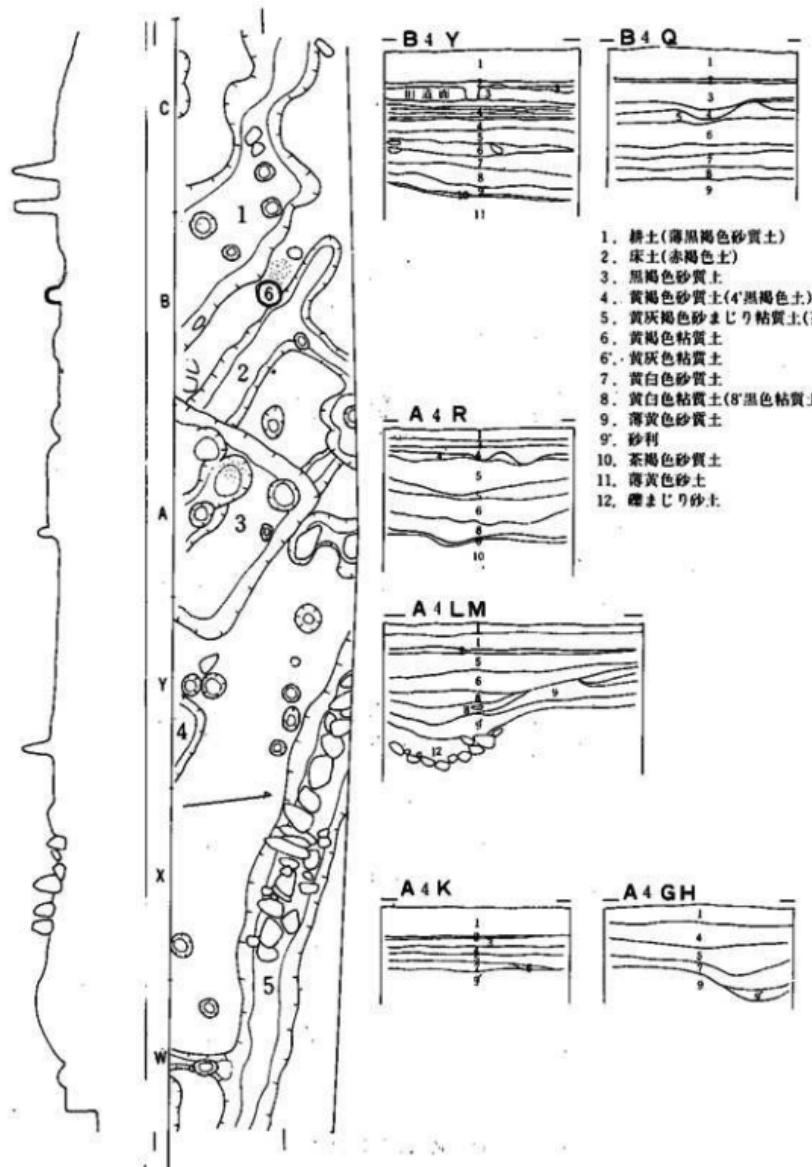
確認こそ得られなかったが、遺物の出土状況・土層状況からみて弥生時代後期の住居址とみたい。

④ その他の遺物(第23図)

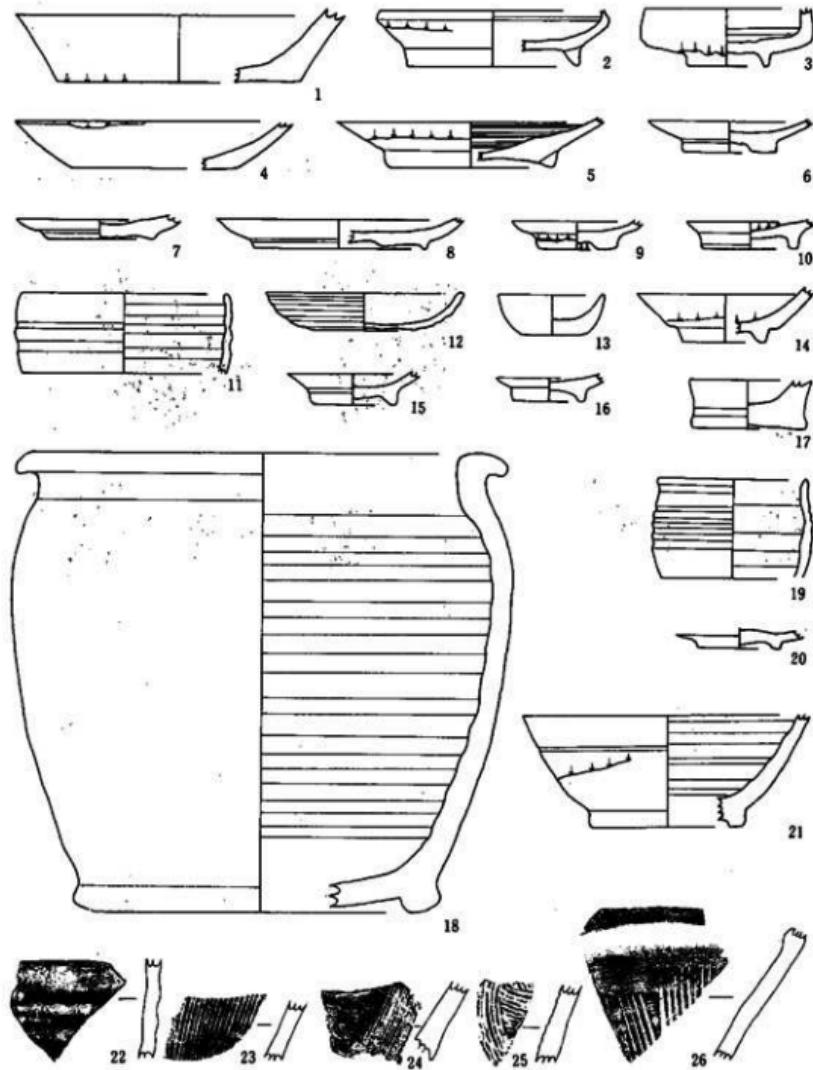
A地区4のI、C地区4のR・Vでは平安時代の灰釉陶器片・須恵器片が出土している。とくにC地区4のVでは、23図5の灰釉陶器底部のほか数片の灰釉陶器・須恵器片が出土している。



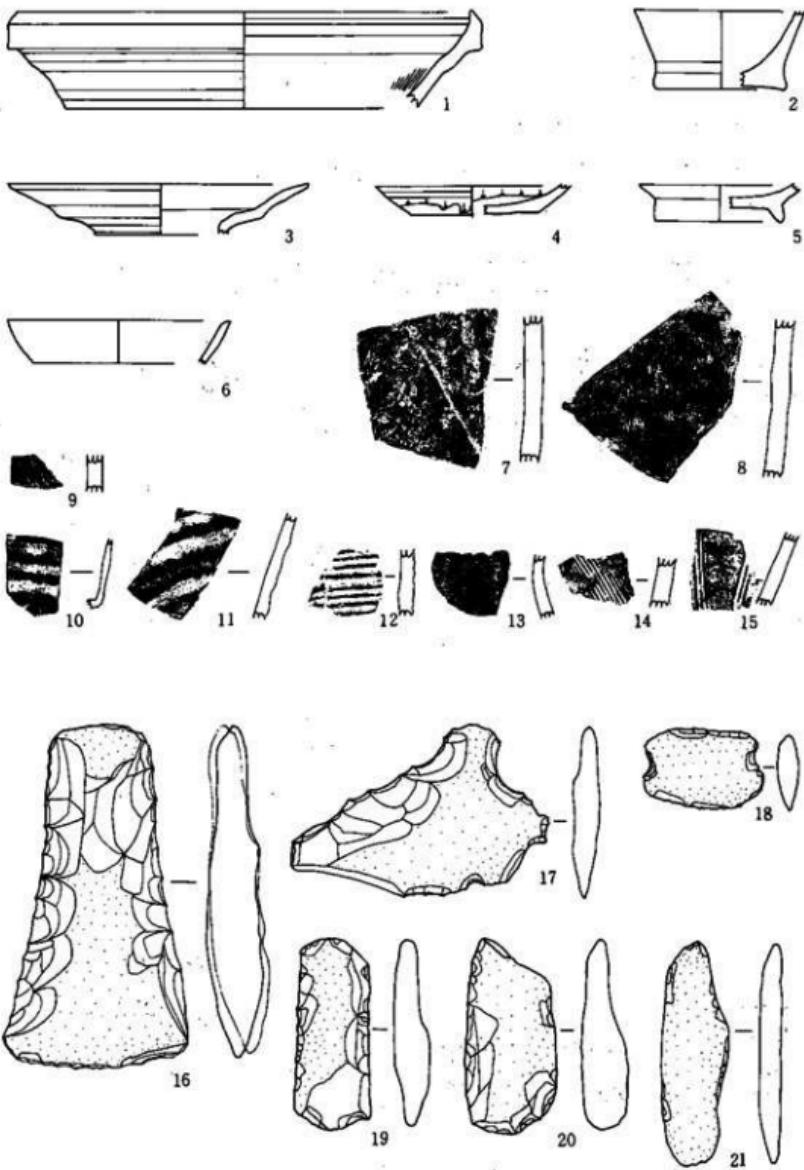
第21図 橋爪遺跡調査地位置図



第22図 橋爪遺跡・近世建物址、グリット土層図



第23図 橋爪遺跡 近世建物址出土陶器



第24図 桶爪遺跡出土陶器・土器・石器

IV 調査のまとめ

1. 柏原C遺跡の調査

柏原地籍にはA・B・Cの3遺跡があり、古くから遺物出土が伝えられていたが、発掘調査は行なわれていなかった。今回の町道柏原9号線の改良工事予定地は、柏原台地の下段先端部に近く、遺跡立地も良さそうで、昭和50年頃、風越高校建設予定地分布調査のおりに、9号線南側で比較的多くの遺物を採集したことがあるので、期待をもって発掘調査にかかった。

調査結果は報告文にあるように、ごく少量の遺物の発見があっただけで、遺構の発見は何もなかった。柏原蔵で有名な程、ローム層の堆積は厚く、それを覆う黒色土・茶褐色土の堆積も50~60cmと厚いので、遺物発見が無いのが不思議な思いがする。近くの台地上には、縄文時代の土器・石器の收拾できるところもあるので、ちょうど、空白地帯に掛かったものと思われる。

2. 栗屋元遺跡IV地籍の調査

遺跡分布でみられるように、栗屋元遺跡はJR飯田線の南側、野底川の左岸台地上の北垣外遺跡に隣接し、上方では同一台地上にありながら、東側では川底の低地を挟んで細長く続く独立の台地上にある。この台地の南縁を削るように、町道辻幹線が拡幅改良されている。この改良工事にともない、昭和60・61年と継続調査をし、上方下段、北垣外遺跡隣接地（II）を調査中に、上段の平坦地の郵政省職員住宅用地（III）の発掘調査が行なわれている。今回の調査は第4次に当たる。遺跡地の台地縁の調査とはいいながら、同一遺跡をこれだけ継続した例は少なく、上方に来るにしたがって、遺物・遺構の発見が多くなることが予想されていた。

とくにIII地籍では、地形条件に恵まれ、縄文時代中期の遺物多出でありながら、住居址の発見がなかった。西側に続くほぼ同一の台地上に立地する障子垣外地籍では、大型土器の発見とともに、炉石の発見も伝えられていて、集落の存在が予想されていた。今回の調査地（IV）は、調査対象地籍が狭いとはいいながら、その中間の位置に当たるので、遺跡の中心に迫る重要な手掛かりとなる場所として期待された。

調査の結果は、溝に切られた縄文時代中期後葉の住居址2軒の他に、縄文時代早期末・中期中葉後葉の土壙27基、大型の溝址2が検出されている。住居址は、個々の形態は不詳であったが、障子垣外地籍で発見されている土器形式に類似していて、この時期の集落の一環とみるとべきよう。土壙群は、ほんの一部の検出であったが、縄文時代早期末の土壙1基を含めて、中期中葉・後葉のものが重複し、障子垣外地籍の集落は、縄文時代早期・同中期中葉・同中期後葉の重複が推測される。集落の規模・それぞれの立地・その重複状況を知るよしもないが、上方見城垣外・隣接北垣外遺跡と続く主要遺跡群の一端に触れることができたと思われる。

もう一つの問題は、溝址の存在である。台地上にある集落に接して、溝址が検出される例は多い。栗屋元遺跡でも、Ⅲ地籍で6条、今回のIV地籍で3条の検出をみている。わずか150mほどのところで9条の溝址であるから、決して少なくない。それぞれの方向は一定ではないが、傾向としては北北東から南南西のものが多い。このことは、栗屋元地籍の地形に添うように思われる。すなわち、南西のやや低位地に接する北垣外地籍から、南側の川底地籍の低地に向かう自然の方向が推測される。個々の溝址が包含する遺物は一定ではないが、その殆どが、縄文時代早期・前期・中期・晩期のもので、新しくても弥生時代後期に限られている。上方・周辺の遺跡時期にもよるが、古い時代に穿たれて、まもなく埋没したもののように思われる。ただ単に溝址と軽く取り扱うのではなくて、立地する地形・集落との位置関係・原地形との方向関係を究明する課題は多々あるようと思われる。

今回の調査区内で検出された溝址は、8m足らず離れて並ぶ住居址を、それぞれ切るようにして検出されている。三つの溝の方向はほぼ同様、二つの台地に挟まれた低地に向かっている。低いから溝ができると考えてみたときに、溝のできそうな低いところに住居址が構築された地形条件を、どう理解したらよいか疑問が残る。周辺の調査の機会があるならば、究明したい課題の一つでもある。

3. 橋爪遺跡の調査

橋爪遺跡の周辺には、西側から東側の上方には矢剣・丹保・堂垣外遺跡が、東側・南側下方には轟上・長橋遺跡が、西南側には一丁田遺跡があって、丹保遺跡群を構成している。今までに発掘調査例がないので、遺跡範囲がはっきりせず、遺跡分布図では周辺に不詳地帯の多い遺跡の一つである。今回の道路改良予定地は、橋爪遺跡の東北縁に当たるところで、遺物・遺構の有無を確かめる試掘調査であった。

調査の結果は報告文にあるように、弥生時代後期の土器・石器、古墳時代後期の土器片、平安時代の灰釉陶器・須恵器片、中世陶器片、近世陶器等が出土し、弥生時代後期の住居址と思われる遺構も検出されている。これらの遺物が多く出たところは、橋爪遺跡の北縁または未登録地籍である。北側の堂垣外遺跡に接する一帯では、古墳時代土器片・平安時代灰釉陶器・須恵器片・中世陶器片が表採できるので、遺跡登録範囲はさらに広がるものと推量される。また、近世建物址を除いては、遺物包含層は1m以上の深さがあり、溝や住居址らしいところは1m50cm以上に及ぶところもある。砂層・黒褐色粘質土・青灰色粘質土等の堆積が複雑で、遺物包含の層も同一でないので、詳細調査によっては、遺構発見も可能な地域と思われる。

写 真 図 版

写図
1

柏原C遺跡遠望



1. 調査地遠望（上方から）



2. 調査地A地区（西から）

写図2
調査前の栗屋元遺跡IV地籍



1. 西から（中央建物周辺がⅣ地籍）



2. 東から（右上方ハウス周辺が障子垣外地籍）

写図3 栗屋元遺跡IV地籍調査地



1. 調査地から（障子垣外地籍を望む）



2. 東側の遺構（4号住居址、溝址9、5号住居址）

写図4 栗屋元遺跡4号住居址、溝址8



上 遺物出土状況・下 溝址8に切られた住居址

写図5
栗屋元遺跡5号住居址、溝址7



1. 西から (5号住居址、溝址7)



2. 東から (溝址と5号住居址)

写図6 栗屋元遺跡4・5号住居址の遺物出土状況



1. 4号住居址



2. 5号住居址

写図7

栗屋元遺跡東側の遺構



写図8 粟屋元遺跡溝址8・土壤24の土層断面



1. 溝址8の北側



2. 土壌24

写図9
栗屋元遺跡溝址8の砂層堆積状況



写図10
栗屋元遺跡C地区の土壤群（東から）



写図
11

栗屋元遺跡土壤
(1)



1. 土壌27・21・19・22・20・24



2. 土壌8・10

写図12
栗屋元遺跡土壤(2)



1. 土壠7



2. 土壠14・4

写図13

橋爪遺跡、調査地と土層

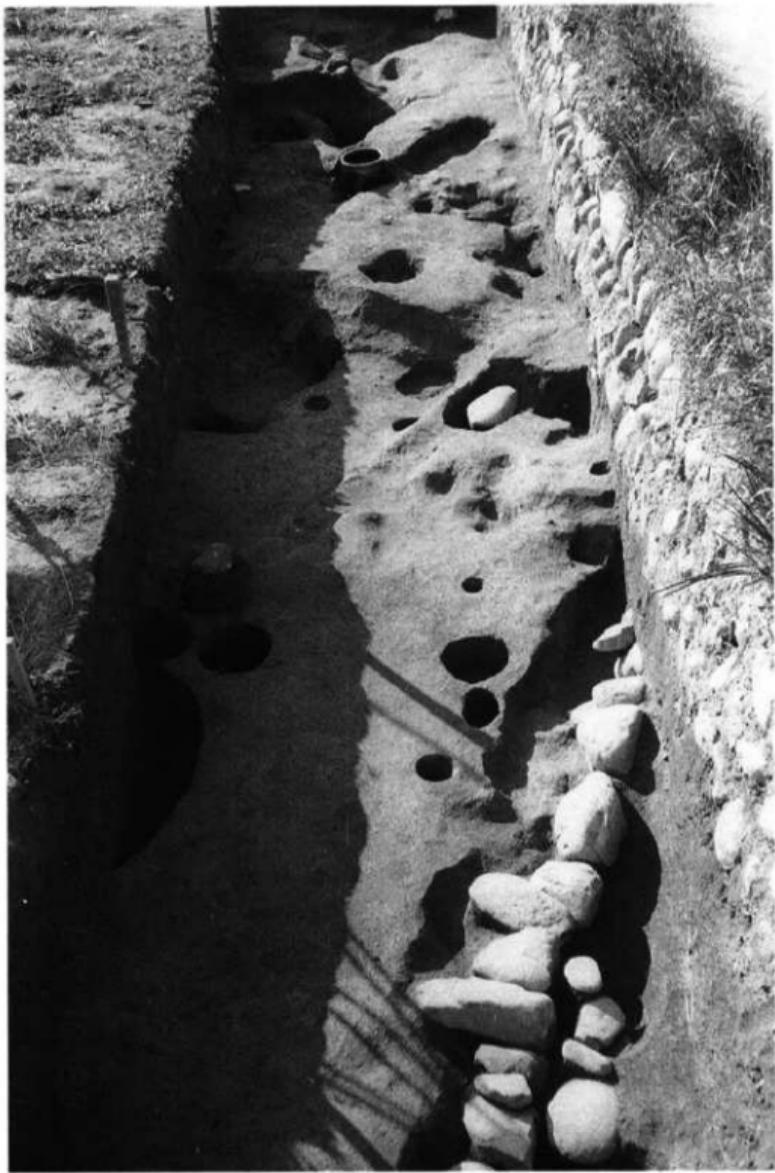


1. 西から



2. B4Y グリットの土層

写図14
橋爪遺跡近世建物址(1)



写図15

橋爪遺跡近世建物址
(2)



1. 石列



2. 堆肥出土状況

後記

当町の埋蔵文化財包蔵地の数は平成元年3月現在で69カ所に及びますが、発掘調査の結果をみると、その範囲は広がる傾向にあります。昭和5年3月に分布調査を完了していますが、当時は主として遺物の表探と分析、地形・伝承等を考慮して範囲の線引きがされています。しかし、水田では表探は不可能に近いし、地形も長い年月に変化しているところがある等、遺跡分布図を作る上では不明確な部分もあります。そこで、範囲外であっても掘り返し工事等を伴う場合は注意する必要があります。

地下にある埋蔵文化財はそのまま保存されることが望ましいとされていますが、一方住民生活の動脈ともいべき道路等の新設・改良も必要であり、このような場合は一般的に発掘調査をして記録保存することで調整を計ることにしています。このような観点から、町が行う各種の開発行為については計画を事情聴取し、状況に応じ規模の大小に係わりなく、発掘調査を行うこととして取扱っています。当町の遺跡分布は広範囲にしかも満遍なく存在するので、至るところで遺跡に係わることになりますが、例えそれが小規模であっても考古学上重要な位置と考えられれば、発掘調査をすることにしています。

今回の報告書はいずれも昭和62年度において町道の改良工事にともなって実施した発掘調査の結果報告で、大事な資料を提供していると同時に、遺跡の状態を推測り、今後の開発時の埋蔵文化財の保護に重要な意味を持つものと確信します。

近年、規模の大小はあれ数多くの調査を行っていますが、これらに十分な体制を持って対処することは非常にむずかしい情勢です。しかし、内的には担当職員の採用・増員をはかる一方、從来から多大な御協力をいただいている今村善興先生の献身的な御尽力を賜り、本書の発刊に至りましたことは誠に喜ばしいことです。

相次ぐ過密な発掘日程の中で調査団長をお努めいただいた今村善興先生をはじめ、調査補助員や発掘作業・整理作業に御従事いただいた皆さんの御苦労に対し、深甚なる感謝と御礼を申し上げ後記とします。

平成2年3月20日

上郷町教育委員会

上郷町埋蔵文化財発掘調査報告書 第22集

柏原 C 遺跡
栗屋元遺跡
橋爪遺跡

— 昭和62年度町道柏原9号線・辻幹線・喬木線
改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成2年3月31日 発行

編集・発行／長野県下伊那郡上郷町教育委員会
長野県下伊那郡上郷町飯沼3,092

印 刷／飯田共同印刷株式会社
長野県下伊那郡上郷町黒田248-1
